

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う



人	類	学
研	究	所
通	信	第21号

2020

巻頭言	2
特集	
コロナとフィールド	
コロナとフィールド ペルー編(渡部森哉)	3
「コロナ禍」の政治性(石原美奈子)	5
新型コロナウイルス感染拡大が明らかにしたベトナム＝日本関係の一側面(宮沢千尋)	7
清めのアルコールと大統領のビタミン注射?(吉田竹也)	9
インドの季節労働者たち——コロナ禍における最も弱い人々(アントニー・サイラジ)	11
講演会シリーズ紹介	
Disability and Japan in the Digital Age Series / 「デジタル時代における障がいと日本シリーズ」紹介(ドーマン・ベンジャミン)	13
「現代中国における観光開発と社会変動シリーズ」紹介(張玉玲)	15
沼澤喜市資料整理報告(湯屋秀捷)	16
人類学フェスティバル2020★オンライン(宮脇千絵)	18
活動報告	23
研究業績	35
刊行物	37
スタッフ	39



南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

## 巻頭言

渡部 森哉 (人類学研究所・所長)

通信 21 号をお届けする。2020 年度の活動報告である。

コロナに始まりコロナに終わった年度であった。この時代の変わり目の状況を記録しておくことは重要であろうということで、今回コロナとフィールドという企画を組み、所員に各地のフィールドの状況を報告していただくことにした。将来、この記述が貴重な資料となっていくことであろう。日本はアメリカ大陸やヨーロッパに比べるとまだまだ、と言われるが、このことが今後の社会変化にどう繋がっていくのだろうか。

南山大学の授業は数週間遅れて始まった。Zoom を使用しての授業はみな初めてで戸惑っていたが数ヶ月で慣れてしまった。人間は変化に対しては慎重であるが、慣れというのはこのようなものか。文化変容は時には急激に起こると思った。

大学での授業対応のためてんてこ舞いであったが、第 2 クォーターから人類学研究所の活動も再開した。7 月 31 日の第 1 回公開講演会を皮切りに、計 7 回の講演会、計 2 回の公開シンポジウム、3 回の共同研究会、そして人類学フェスティバルが実施された。その他、共催の講演会 1 回、共同主催のシンポジウムも開催した。いずれも Zoom を用いたオンライン企画であった。世界中からリアルタイムで参加することが出来るため、特に英語による企画では参加者数が多くなった。対面形式で開催したならば、このような参加者数は見込めなかったであろう。しかしながら、講演会やシンポジウムの後には懇親会が開催され、そこで様々な話をするこ

常であった時代を懐かしく思う。

コロナのため当初の計画は変更を余儀なくされた。公募シンポジウムの募集はとりやめとなり、予定していたインドから研究者を招聘してのシンポジウムなども中止になった。年度ごとに研究所員がそれぞれ企画案を出し合うのであるが、そもそも 2020 年度の活動は難しいという前提で話が進められた。コロナが落ち着いたら、という前提で温めている企画があるが、それらを実現できるように準備していきたい。

これまで人類学研究所では、年度ごとに公開講演会、公開シンポジウムをナンバリングしていた。2020 年度より、複数の年度にまたがる一連の企画をまとめるシリーズという名称を使用することになった。障がいシリーズ、Asian Ethnology シリーズ、現代中国における観光開発と社会変動シリーズ、の 3 つのシリーズが現在進められている。

2020 年度の人類学フェスティバルは、中京大学をはじめ、学外の機関とのコラボレーションによって実施された。人類学研究所が東海地方の人類学研究のハブとしての役割を果たすという目的を果たすため、今後も活動を進めていきたい。

2020 年度は、ドーマンさん、宮脇さんの第一種研究所員が 2 人で切り盛りする体制の 2 年目であった。2 人が中心となり研究所の活動は軌道に乗っているように見えるが、まだまだ出来ることはある。特に第二種研究所員の関与をより大きくして、活性化させていきたい。

## 《コロナとフィールド》

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を大きく受けた年だった。そこで、ふだん世界各地でフィールドワークをおこなっている研究所と人文学部人類文化学科のスタッフにペルー、エチオピア、ベトナム、インドネシア、インドでの感染状況や対策について報告してもらうこととした。

## コロナとフィールド ペルー編

渡部森哉 (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

2020年3月15日、ペルーにて非常事態宣言が出されたとき、私はペルーの海岸の町にいた。そしてその夜の夜行バスで拠点となる山地の町に戻った。それからチャーター便を利用して6月6日に日本に帰国するまでずっとペルーにいた。ペルーを訪れていた外国人は母国に帰る方法を情報収集して、それぞれ帰って行った。こうしたときに中心になったのは各国の大使館である。私は改めて自分が日本人であるということを認識させられた。基本的には日本が手配したチャーター便で出国したが、席に余裕がある場合は他国のチャーター便の案内が大使館経由で届いた。こうした動きが8月頭ぐらいまで続き、希望者はその頃までに帰国した。その後ペルーに残っている人はペルーに生活拠点がある人たちである。

日本が手配するチャーター便は当初リマ在住者向けのみであった。そして観光客が多く滞在していたクスコからリマへの臨時便も手配された。私もリマにいたならば3月末か4月頭のチャーター便で帰国できたのだが、いたのは田舎町である。手も足も出ない状態であったが、大使館経由で国内移動の手続きをすることが出来ることになった。全部自腹であるが、車を借りて運転手を2名つけて移動するという条件であった。そしてリマまでの850kmを移動した。パンアメリカンハイウェイには車が殆どなく、非常事態宣言の強さを実感した。リマ在住の人々は地

方に帰る手段もなく、途方に暮れた人々はなんと歩いて帰りました。数百キロ歩くのに何日かかるのであろう。私が帰国してから1ヶ月ほどして、7月頃から条件付きで国内バスの運行が再開した。リマで仕事が無くなって、バスの再開まで待てなかった人々が多かったのである。

テレビでは毎日感染者数の報告、そして補償金の分配方法が説明された。さらには年金の取り崩しも認められた。そのうち商業便が復活するであろうと思っていたが、結局2021年5月1日現在、1年以上も再開されず国境は閉ざされたままである。私自身の見通しは非常に甘かった。

非常事態宣言のため、2020年の調査計画は全ておじゃんになった。現地では何も出来ない。ペルー人でさえも発掘調査をすることは難しい。発掘を続けた考古学者は通報され、そのニュースがネット上で流れた。遺物調査も難しい。私は幸いペルーにいた間、遺物の分析をある程度進めることができた。図面化する資料を選別し、ペルー人共同研究者に届くよう手配し、出国した。現在も図面化を少しずつ進めることが出来ている。

ペルーではクントゥル・ワシ村という辺鄙なところにいた。だから感染者はいなかった。ようやく感染者が出たという報告は2021年2月3日に届いているので、およそ1年近く感染者が出なかったことになる。そして現在感染者は増え続けている。私が3食食

べていた食堂の家族も4月にコロナにかかったが、幸い無事回復した。ワクチンが行き渡り、国境が開くのはいつになることか。

私がいた間に大統領であったマルティン・ビスカラはよくやっていたと思う。しかし法律改正して国会議員が連続して立候補できなくなったため、議員から嫌われ、過去の汚職をはじくり返され、その座を失った。2021年の国会議員選挙でトップ当選したにもかかわらず、議員にはなれないことになってしまった。しかも、ワクチンを内緒で優先的に接種したことが暴露された。

ペルー人は言うことを聞かない。非常事態宣言がでている間でも出歩き、警察に捕まる人が続出し、数万人に達した。非常事態宣言が出ているため軍隊も出動している。自主的な自粛が機能する日本とは大違いである。非常事態宣言中でも我慢できず、隠れてパーティーを開き捕まった人たちのニュースはよく流れた。一般の人だけでなく、村長など政治家も捕まった。初期の段階では曜日ごとに外出できる人の性別を変えるという奇策が出されたがすぐに撤回された。あの手この手で押さえ込もうとするがそれを破る人たちが続出した。

アメリカ大陸では、アメリカ、メキシコ、ブラジル、が死亡者数のトップ3である。ペルーでは食生活が比較的恵まれているせいか、死亡率は低い。それから医療保険に入っている人が少ないため、医療費は100%負担である。そのため治療を受けることが出来ない人々もいるため、医療格差はすさまじい。ペルーでの死者の数はアメリカやメキシコと比較すれば少ないが、それでも多い。カトリックの国であるから、基本的に火葬はしない。棺桶に入れて土に埋めるか、蜂の巣のような建物の穴に横方向から棺桶を入れて安置する。コロナ禍で火葬が推奨されることになったが、ペルーでは火葬場は一部の大きな町にしかない。死体の処理を担っているのは主にベネズエラ人だという。ベネズエラは政変で大変なことに

なり、仕事がなく生き延びるために多くの人々が脱出した。そしてペルーにも多くいる。貧困問題が幾重にも重なっている。

子供たちにもしわ寄せが行った。授業はオンラインになり、特に山地でインフラが整っていない家庭は授業を受けることが出来ない。もともとペルーの公立学校は何かにつけて休校することが多いが、コロナによって格差はさらに進んでいる。

山地は農民が多いため、食料には困らないかというところではない。ペルー北部の物流は山地からいったん西の海岸の町に集まり、そこで買い出しをして山地に運ぶという東西方向の動きが中心である。しかし海岸に買い出しに行ったトラック運転手が感染したからということで、できるだけ山地から海岸には人が行かないようになった。島国根性というか、山地民根性というか、外部に対して非常に警戒していたことは確かである。そのため、海岸地帯では物価がどんどん下がった。逆に山地では上昇した。だから食事のバリエーションはどんどん限られていった。非常事態宣言であるから、飲酒も禁止であった。

一方、研究は上流階級の人々の職業であるから、zoomによる講演会、シンポジウムなどが矢継ぎ早に企画され、その案内がどんどん届く。時差が14時間あるのでなかなか参加しにくいのが、オンライン対応がスムーズに進んでいる。ペルー考古学関係の集會も毎年8月に開催されていたが、2020年はオンラインで開催された。多くはレコーディングして視聴という形であり、むしろ聞き直せるので理解は進むが、人と会えないので物足りない。犬の鳴き声や車の音など、生活音が混じってくるのもペルーならではの。考古学関係のシンポジウムなどがあるとその後必ず飲みに行くのであるが、それも出来ない。どこも同じである。2021年4月現在、ペルー文化省は条件付きで発掘許可を出しているが、多くの調査は中断したままである。

## 《コロナとフィールド》

### 「コロナ禍」の政治性

石原美奈子 (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

現在、アフリカでは新型コロナウイルスが猛威を振るっている。南アフリカやナイジェリアでは、独自の変異株のウイルスが発見され、その影響で感染者数が押し上げられ、死者数も増えているという。一方、私が30年来通っているエチオピアでは、保健省が公表している感染者数や死者数は増減を繰り返しながら、一定レベルで推移している。数値としては、それほど高いというわけではない。それもそのはずで、PCR検査の件数自体が少ないので(1日あたり5000件ほど)、必然的に陽性者数も限定されてくる。この数値に安心しているのか、人々の生活はコロナ禍で劇的に変化したとはいえない。首都では、マスクを着用した人々をちらほら見かけることはあるが、地方都市や村では、マスクをするどころか、コロナは「嘘」と信じる者もいるという。ウイルスは目に見えないため、重症化しない限りは、罹患を実感することはない。若者は罹患しても軽症ですむが、高齢者は重症化しやすいのが、新型コロナウイルス感染症の特徴だとするなら、ますます対策は疎かになろう。私の知り限りでも、呼吸器系の疾患とは無関係の理由で入院した者が、「いきなり呼吸困難になって亡くなった」というケースもあり、コロナによる死者は認識されていないものを含めるとかなりの数に上るのではないと思われる。

エチオピアの人口は、現在爆発的に増加しており、年間増加率も3%以上を記録した1990年代よりは減少しているものの、2%台後半を維持している。私がエチオピアを初めて訪れた1990年、現地の人に日本の国土面積と人口について聞かれた時「国土はエチオピアの3分の1だけど、人口は3倍」と答えたのを記憶している。ところが、いまや減少の一途をたどる日本の人口にエチオピアの人口が追いつくのも時間の問題となっている。毎年訪れていると、人

口増加は、首都の交通渋滞やタクシーを待つ行列の長さが尋常でないとか、地方の田舎では未使用の土地が狭くなっているとか、村では子供と若者がとにかく多いといった感覚的な変化を通して実感できる。一方、確かにエチオピアの経済成長率は毎年二桁のレベルで上昇しているが、人口増加に比例して政治経済的利権や生産力が増えたとまではいえない。少ない資源をめぐる争いが起きるのは世の常である。人口の爆発的増加が国家的課題であるとするならば、コロナ禍は取るに足らない問題なのかもしれない。コロナ禍の危機が声高に叫ばれるようになっているのは、人口減少が顕著で高齢者人口の比率が高い欧米やアジアなどの国々であり、アフリカ、とくに今日のエチオピアでは、コロナより深刻な政治的問題が山積している。

2020年は、エチオピアの歴史に残る年となった。コロナの世界的流行に対して欧米をはじめとする先進諸国が編み出した「マスクをする」「手洗い・消毒」「ソーシャル・ディスタンス」などの対策をいち早く導入したアビー首相は、ノーベル平和賞受賞者に相応しく模範的な施策を展開した。コロナ禍を理由に、8月に予定していた総選挙も急遽中止とされた。ところが、2020年7月にオロモ人気歌手が殺害された事件をきっかけに起きた暴動で、オロモ過激派とティグライ人民解放戦線(TPLF)が対アムハラ対アビー政権で連携していることが明るみに出た。そして同年8月の総選挙が中止となったことに反対してTPLFが主導権を握るティグライ州で独自の州選挙が強行された。TPLFは、州選挙で勝利を得ることでティグライ州における支持を盤石なものとし、かつてエリトリアがそうしたように、ティグライ州をエチオピアから分離独立させたかったのかもしれない。TPLFは、10年以上続く武力闘争の末に1991年

5月に政権を奪取し、27年間にわたりエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）政権の中核を占めてきた。政治権力と経済的利権をティグライ民族が牛耳る国の在り方に不満を募らせたオロモやアムハラが暴動を繰り返すなかで2018年に政権を任されたのがアビー・アフマド首相だった。長らく交戦状態が続いていた隣国エリトリアとの和平を実現し、大勢の政治犯を釈放し、非合法組織に指定されていたオロモ解放戦線（OLF）との和解を成し、（武装した）戦闘員の流入を赦したのもアビー首相であった。だが、TPLFとしては、アビーのそうした政策は想定外であり、裏切り以外の何ものでもなかった。そのため、TPLFはかつてデルグ政権と戦ってそれを倒したのと同じように、政権を奪い返すことができると考えたのだろう。ティグライ州各地に武器や燃料、医療品を隠匿し、逃避のための地下トンネルまで作って連邦軍との全面衝突に備えた。

そしてついに2020年11月、TPLFがエチオピア連邦軍部隊を攻撃したことで戦闘が開始されたのだ。だが、州都メケレはほどなくして連邦軍の手中に落ち、TPLF幹部の大半が犯罪者として追跡され、次々に逮捕ないし殺害された。そして、2020年暮れから2021年前半にかけて、逃散するTPLFへの連邦軍部隊による攻撃、連邦軍部隊や越境してきたエリトリア軍によるティグライ一般市民に対する

暴力、そしてTPLFの残党によるアムハラ一般市民を標的とした虐殺・破壊行為などが相次いで起きた。またそれだけでなく、TPLFと手を組んでいたとされる過激派のオロモ解放軍（OLA）が、オロミア州などにおいてアムハラ市民に対し虐殺と破壊行為を展開し、大勢の犠牲者と避難民が出た。こうした暴力行為が国内各地でランダムに発生するなかで、コロナ禍への警戒心は次第に薄れた。

2021年6月、エチオピアは（2020年から持ち越された）総選挙が実施された。コロナは昨年8月よりも猛威を振るっているにもかかわらず、そして、治安情勢の改善が見られないにもかかわらず、アビー政権は「選挙による勝利」という西洋的な「民主主義」という尺度で自らの政権の正統性を確保・アピールしたかったのである。対抗馬となる政党が存在しない現状では、アビーが率いる繁栄党が勝利することは選挙を行わなくても明らかである。エチオピアにおいて「コロナ禍」は、アビー政権にとっては、対外的に模範的な施策を展開してみせる契機である半面、反対勢力を排除・弾圧するきっかけに過ぎなかったのかもしれない。マラリアや結核、政治的暴力（紛争・暴動・虐殺など）により大勢が犠牲になる社会において、「コロナ禍」は優先的に取り組むべき政治的課題とはなっていないのである。

## 《コロナとフィールド》

新型コロナウイルス感染拡大が明らかにした  
ベトナム=日本関係の一側面

宮沢千尋 (人文学部人類文化学科)

人口9,600万人のベトナムにおいて<sup>1)</sup>、新型コロナウイルスの感染者は2,852人、死者は35人(2021年4月26日現在)である<sup>2)</sup>。1日の感染者、死者ではない。現在までの累計である。現時点では、ベトナムは新型コロナウイルスの流行拡大を抑えることに成功しているといえる(その後、急速に感染が拡大したが、7月1日時点で死者は81人である)。

これにはいくつか理由がある。最大の理由は、ベトナムの国家体制がベトナム共産党の一党支配であることだ。憲法で認められた唯一の政党である共産党は北部では1945年の八月革命以降政権を握り、対フランス戦争(1946-1954年)、対アメリカ戦争(いわゆるベトナム戦争、1960-1975年)を指導して独立を勝ち取り、全国を統一した。その後も、ポルポト体制のカンボジア、ポルポトを支援した中国との戦争も経験した。「一党制」の下で政府の意思決定が迅速に行われ、戦争中に培われた上意下達のシステムにより、ロックダウンを含む措置が効率的に実行されているのである。

2つ目は、国民の間にも長く続いた戦争の経験から「非常時」体制への対応の準備ができており、政府の新型コロナウイルス対策について概ね好意的に評価し、それに従おうという雰囲気があることである。

さらに、2003年にSARSが世界的に流行した際、ベトナム政府はWHOに情報を正確に伝え、勧告を受け入れて積極的な感染拡大防止策を採り、高く評価された。この経験が共産党・政府・国民に大きな自信となっているのであろう。

筆者は昨年2月初旬、ベトナムに調査のために渡航したが、すでに小学校から大学まで旧正月休み後も休校になることが発表されており、中国との国境は人や物の通過が厳しく統制されていることが連日地

元メディアによって伝えられていた。研究機関の中には閉鎖されたところもあり、首都ハノイの行きつけのレストランでは客や従業員の検温(従業員は店を出て戻ってくる度ごと)が行われ、食器類はラップでぐるぐる巻きにされており、はがすのに苦労したほどであった。

しかし、ベトナムにとって新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、とりわけ経済成長に悪影響を及ぼしている。2018年、2019年にそれぞれ7.1%、7.0%だった実質GDP成長率は2020年には2.9%に留まった<sup>3)</sup>。そして、近年、爆発的に増えている日本で働く技能実習生や留学生の中には仕事やアルバイト先を失って路頭に迷い、犯罪に手を染める事例が増えている。ネット上では「一切入国させるな」「なぜ帰国しない、させないのか」などの声も出ているようだが事はそれほど簡単ではない。

言うまでもなく、少子高齢化が進み労働人口が減少している日本では、現在の経済一般やサービス業の利便性の水準を維持しようとするなら、外国人労働者に依存しなければならない。一方、ベトナムでは「ドイモイ政策」により1990年代半ばから経済成長が続いているが、安定した高給の仕事は都市に集中し、教育機関のレベルも都市と地方で大きな格差があり、加えてコネ社会なので、高等教育を受けておらず、コネもない地方出身者が国内で安定した職を探すのは難しく、「労働力輸出(xuất khẩu lao động)」、すなわち海外で働くことを選択する。

在日ベトナム人労働者、特に技能実習生(後述)が急増するようになったのはここ10年余りのことである。『ベトナム総合情報サイト VIETJO』(2020年2月3日付)の記事は厚生労働省の「外国人雇用届出状況」を引用して、2012年に2万6828人だっ

たベトナム人労働者数が2017年に24万259人、2018年に31万6840人、2019年に40万1326人(前年同期比26.7%増)と急激に増加したことを伝えている<sup>4)</sup>。

この傾向は新型コロナウイルスの世界的感染拡大以後も変化はなく、最新の「外国人雇用届出状況」(令和2年10月末現在)によれば、ベトナム人労働者数は44万3998人(全外国人労働者数の25.7%)で、前年と比べ4万2672人、10.6%増えた。国籍別でも中国(香港等を含む)の41万9431人を抜いて初めて一位となった<sup>5)</sup>。うち技能実習生は21万8600人である。2021年4月末の段階で新規の受け入れは停止されているとはいえ、再開されれば多くのベトナム人実習生が来日するだろう。

一方で前述のように、ベトナム人による犯罪のニュースが連日報じられ、同時に従来から問題視されていた技能実習生制度や、留学生(「資格外活動」として週28時間までのアルバイトが法的に認められている)の問題点が、改めてより多くの日本人に知られるようになった。いずれも、外国人の「いわゆる単純労働者」を受け入れないという国家政策と、前述の労働力不足との矛盾を解消するための「隠れ蓑」として使われていることが指摘されてきた。技能実習生制度とは、建前上は「人材育成を通じた開発途上地域への技能、技術または知識の移転による国際協力の推進」が目的とされるが、実際には日本人労働者を採用しづらい重労働かつ低賃金の職場にとって、労働者を継続的に獲得するシステムとなっている(望月2019:115)。労働環境は劣悪であり、長時間労働、最低賃金違反、残業代の不払い、安全や衛生に関する基準を下回る職場環境、暴力やパワハラ、セクハラなどが横行している(望月2019:116)。来日前に聞かされていた仕事内容ではないこともあるし、ベトナムだけではなく、送り出し側のブローカーが日本への渡航費用として多額の金銭を要求し、実習生が借金してそれを払うこともある。来日後、労働環境の劣悪さに気づいても転職の自由は無く、「実習先」から失踪した時点で不法滞在(在留資格喪失)になる。新型コロナウイル

スが日本国内で拡大した昨年からは「実習先」が倒産したり、解雇される実習生が出始めてようやく転職の自由が認められるようになったが、日本人ですら失業しているので再就職先を探すのは容易ではない<sup>6)</sup>。一方で帰国しようにも、ベトナムと日本の間の定期便は現在運休、チャーター便が運航されるだけなのでチケットも取れず、帰国しても借金は残るのである。2019年から新たに「特定技能」という就労を目的とした在留資格が設けられたが、応募者は未だ少ないという。

週28時間のアルバイトを認められている留学生の場合も、アルバイトが減ったり、無くなって収入の途が閉ざされる例が報告されている。この制度も、最初から日本で就労する・させる目的の「隠れ蓑」として使われてきた経緯がある。

新型コロナウイルスの感染拡大ははからずも、以上のようなベトナム=日本関係の一側面を一挙に顕在化させたのである。私にとってフィールドとはベトナムにあり、同時にそれは「アウェー」だと思っていたのだが、いつの間にかベトナムは「ホーム」に、つまりすぐ隣にあるということに遅まきながら気がついてあたふたしているというのが正直なところである。

#### 註

- 1) ジェトロ『概況・基本統計—ベトナム—アジア—国・地域別に見る』、[https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic_01.html) (2021年4月27日アクセス)。
- 2) ロイター『ベトナムにおける新型コロナウイルスの感染状況・グラフ』、<https://graphics.reuters.com/world-coronavirus-tracker-and-maps/ja/countries-and-territories/vietnam/> (2021年4月27日アクセス)。
- 3) ジェトロ、同上。
- 4) VIETJO ベトナムニュース『日本のベトナム人労働者数40万人超、国籍別2位—増加率最高 [統計]』、<https://www.viet-jo.com/news/statistics/200203163033.html> (2021年4月27日アクセス)。
- 5) 厚生労働省『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(令和2年10月末現在)』、[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_16279.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_16279.html) (2021年4月27日アクセス)。
- 6) 『朝日新聞』(2021年1月21日朝刊)、『中日新聞』(2021年2月24日朝刊)。

#### 参考文献

望月 優大  
2019 『ふたつの日本——「移民国家」の建前と現実』、講談社現代新書。



## 《コロナとフィールド》

# 清めのアルコールと大統領のビタミン注射？

吉田竹也 (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

インドネシアでは、2021年3月末の時点で、感染者150万人以上、感染死者4万人以上を記録しており、他国と同様、行動制限・出入国制限は緩和と強化を繰り返している。以下では、私がバリ島と首都ジャカルタに在住する知人から得た情報とメディア情報をもとに、それぞれの地域における状況の一端を紹介することにした。

バリ島では、2020年3月にCOVID-19の感染死者が確認され、外出自粛と観光者受け入れ停止の措置が講じられた。観光依存体質を深めてきたバリの社会・経済は、21世紀初めの爆弾テロ事件以来、約20年ぶりにふたたび深刻な状況に陥った。観光地は半ばゴースタウン化し、観光関連産業に従事する人々は長期におよぶ観光者不在状況にひたすら耐えるしかない日々を送っている。

バリ州バリサド（ヒンドゥー協議会）は、2020年3月に、感染対策として、手洗い・消毒をし、マスクを着用し、社会的距離を十分とり、必要以上に人が集まらないよう少人数で儀礼を行う、延期が可能な儀礼は延期する、COVID-19による死者は直ちに火葬にするため儀礼措置はできない、などの基本方針を示し、政府の感染対策を踏まえつつ必要な儀礼を適切に営むよう声明を出した。感染防止に資する合理的な対処をもとめたのである。また、神の加護によりCOVID-19が消え去るように祈るよう呼びかけたり、災禍を祓うチャル儀礼を催行したり、ウイルスに罹患しないように人代わりの供物（banten wong-wongan）をつくって川や海に流すよう指導したりもした。こうした宗教的な対処と現実的で合理的な対処との折り合わせは、2000年代のテロ事件の際を彷彿とさせる（拙書参照）。

慣習村や集落の入り口で、自警団などが出入りする人々にアルコール消毒をする時期もあった。手の消毒が目的だが、中には、祈りのときに司祭等からもらう聖水とおなじように、このアルコールを頭につけた

り少量を飲んだりする人も見かけられたという。アルコールの取り扱いにも、宗教的なものと合理的・医学的なものとの交差は垣間見られたのである。

\*

次に今年のジャカルタに目を転じよう。ワクチン接種は2021年1月にはじまった。使用されたのは、中国では2月になって承認されたシノバック・バイオテック製ワクチンである。国内第1号の接種者はジョコ大統領（通称ジョコウィ）であり、集団免疫の観点から広く人々に接種をアピールする狙いがあった。ワクチン接種は無料となるが、世界第4位の人口2億6千万人のこの国では、集団免疫獲得のために総人口の2/3に当たる1億8000万人のワクチン接種が必要とされ、順調にいても年内には完了しない見通しである。

興味深いのは、首都ジャカルタの人々におけるこの大統領のワクチン接種の受け止め方である。あれはワクチンではなくビタミン注射だ、というジョークも一部で聞かれた。ジャカルタの一定数の人々がワクチン接種に不安やネガティブな思いを抱くのは、医療体制の脆弱さ、使用するワクチンにたいする信頼性の疑義、中央政府の政策への不満、フェイクニュースや真偽不明の情報に満ちたネット依存傾向などに加え、その背後に、アメリカとはまた別の近年の分断傾向があるからだと考えられる。概略を以下に述べる。

2019年の大統領選挙は、庶民派で非ムスリムにも広く浸透する現職大統領のジョコウィと、元軍人エリートのプラボウォとの再決戦となった。イスラーム系

勢力は、プラボウォを支持した。これは、2016年にジャカルタ知事のアホック（華人系クリスチャンであり、大統領に就任したジョコウィの後継として首都知事に就任していた）がクルアーンを侮辱する発言をした、という情報が広まったからであった（ユダヤ教徒やキリスト教徒を指導者／擁護者としてはいけないというクルアーンの一節に触れ、クリスチャンである自分に投票できないとすればそれは仕方がない、などと述べた動画がネット上で拡散したのだが、動画は一部を切り取られて編集されたものだったようである）。アホックは、2017年の首都知事選敗退後、宗教冒瀆罪で有罪判決を受け収監された。アホックの言動は、首都や大都市におけるムスリムの大規模なデモを誘発した。しかし、プラボウォは大統領選に敗れた。他の争点も無論あり、ムスリムがこぞって彼を支持したわけではなかったのである。選挙結果に不満なプラボウォ陣営は憲法裁判所に訴えを起こし、これを支持する人々はデモを起こしたが、その後プラボウォはジョコウィと手を結び、国防相として入閣した。ムスリムの中にはこれに呆れる声もあったが、こうして政治＝宗教的な分断はいったん伏流することになった。COVID-19の感染拡大は、伏流していた分断——イスラーム重視のムスリムとかならずしもそうでないムスリムの間、ムスリムと非ムスリムの間における——を再起動させた。主役のひとりとなったのは、イスラーム系勢力の支持を受け、アホックを破って2017年の首都知事選に勝利したアニスである。アニスは、2020年3月下旬からジャカルタでの娯楽活動を制

限し、4月からは大規模な社会的制限を実施するなど、危機管理対応を進めた。中央政府の反応が鈍い中で感染拡大が進んだこともあり、アニスの対応は、支持層のムスリムの評価とジョコウィ批判を高めた。その後、中央政府も、行動制限などの対策を地方政府と強調しつつ打ち出した。しかし、アニス支持派のムスリムにジョコウィの政策対応は評価されていない。

\*

以上は、COVID-19の感染拡大がインドネシアの社会や宗教におよぼす影響の断片の情報にすぎない。ただ、感染収束後、バリでは勝ち残った強者と敗者との経済格差がいつそう拡大することは確実である。一方、ジャカルタでの政治＝宗教的分断傾向の今後は、2024年の大統領選の候補者選びにひとつかかっている。「多様性の中の統一」を掲げてきたこの国の行方は、世界リスク社会下においてより不透明感を増している。

#### 参考文献

ランティ、イルマン・G

2020 「分断社会における新型コロナウイルス対策——インドネシアの事例」『IDE スクエア 世界を見る眼』、川村晃一訳、IDE-JETRO。

([https://www.ide.go.jp/Japanese/IDESquare/Eyes/2020/ISQ2020\\_010.html](https://www.ide.go.jp/Japanese/IDESquare/Eyes/2020/ISQ2020_010.html))

吉田 竹也

2021 「観光恐慌 2020年に関する覚書——観光リスク論の観点から」『アカデミア』人文・自然科学編 21号：297-306。

——— 近刊 『神の島樂園バリ——文化人類学ケースブック』、樹林舎。

## 《コロナとフィールド》

インドの季節労働者たち  
——コロナ禍における最も弱い人々

アントニー・スサイラジ (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

新型コロナウイルスのパンデミックはインドの人々に様々なダメージを与えているが、特に大きなダメージを受けたのは季節労働者である。なぜなら、彼らは仕事や金銭、食糧、住居、医療等、人として基本的に必要なことを奪われた状況だからである。調査によると、季節労働者のほとんどは社会経済的に恵まれていないダリット (Dalits - インドの最も低いカースト身分であり、「不可触民」として差別されている) とアーディワシ (Adivasi - インドの部族民たちの総称) である (Srivastava: 2012)。インドの北と東北部のほとんどの農村地域におけるダリットとアーディワシへの社会経済的な搾取により、彼らは失業や食糧難に直面し、インドのより大きな都市、特に都市化された南インドの町へ移動していくこととなった。全国標本調査室 (NSSO) の調査によると、インドには人口の30%に当たる3億2,600万人の季節労働者が存在し、都市部の人口の3分の1に相当する<sup>1)</sup>。彼らは製造・建設業の非公式経済部門で働く日雇い労働者である。過酷な労働、不備な住宅、低賃金、差別に加え、医療や教育など市民としての権利もなく、貧困と故郷からの隔離の重荷に苦しんでいる。

インドにおけるロックダウンがほぼ間違いなくパンデミックを抑制する最善の策であったものの、その実施は突然で十分準備されたものではなかった。都市の季節労働者、非公式経済部門の労働者や学生に関する問題への方策は事前に全く想定されていなかった。ロックダウン以後にまず彼らが直面した問題は、食糧、住居、賃金の喪失、感染への恐れや不安に関することであった。ある新聞の調査では季節労働者の96%が政府からの食糧の配給を受けず、90%がロックダウン時に賃金を得られなかったことが

報告されている<sup>2)</sup>。その結果、何千人もの季節労働者たちが次々と都市から逃げ出し、徒歩または自転車で故郷に避難を始めた。不幸にもロックダウンの間、彼らの食糧や宿泊施設、安全に故郷に帰るための交通手段など彼らを支援する方策が州と中央政府により取られていなかった。彼らは大きな集団となり共に移動したため、ソーシャルディスタンスを保つことは困難であった。無情にも、州の境界の検問所でロックダウンの規範に反するとして逮捕や暴行を受け、故郷に辿りつくまでの困難や空腹、事故、疲労、そして時には自殺さえも原因となり命を失った者も多かった。この大移動で大きく報道されたのは、15歳の痛ましい季節労働者の少女、ジョティ・クマリが病気の父親を自転車に乗せて、ニューデリーから故郷の村まで1,200キロの距離を移動したことである<sup>3)</sup>。一方で、季節労働者たちは都会から逃れ生計を失っただけでなく、帰郷できた者は潜在的ウイルス保菌者と見なされ、警察や地元の人々に病人と扱われた。一例では、帰郷したあるグループはウイルスを除去する科学薬品のスプレーをかけられ、そのことに対して、後に地方自治体が謝罪をした<sup>4)</sup>。インド政府はロックダウンの第一段階では率先して在外インド人が本国に帰還できるよう努めたが、季節労働者たちが故郷に戻る際の多くの困難には目をつむっていた。このことは明らかに社会的弱者で声を上げられないダリットなど低いカースト身分や部族民である季節労働者たちへの政府の怠慢と無関心の表れと言える。ロックダウン時に労働先の都市での過酷な状況を体験したにもかかわらず、彼らはロックダウンの規制が緩められると、故郷での雇用不足や飢えにより、再び都市への逆移動を始めている。新型コロナウイルスのパンデミック危機が続き、経済構造の崩

壊により季節労働者など社会の周縁にいる人々はより一層社会の影響を受けやすく、無力な存在となる。彼らがパンデミックと闘い、人間として生きるために政

府と社会事業団体の双方の経済的人道的援助、医療支援が求められる。



故郷へ移動する季節労働者たち (1)  
The Times of India (2020年3月29日)より



故郷へ移動する季節労働者たち (2)  
Deccan Herald(2020年3月27日)より

註

- 1) Migration in India, (2007-2008, NSSO). Accessed on 4 April 2021 in [https://www.thehinducentre.com/resources/article33374171.ece/binary/533\\_final\\_compressed.pdf](https://www.thehinducentre.com/resources/article33374171.ece/binary/533_final_compressed.pdf).
- 2) The Hindu (2020年4月20日)
- 3) New York Times (2020年5月22日)
- 4) India Today (2020年3月30日)

参考文献

- Srivasta, Ravi  
2012 Internal Migration in India: An Overview of its Features, Trends and Policy Challenges. In UNESCO/UNICEF National Workshop on Internal Migration and Human Development in India, Workshop Compendium 2, pp. 6-7. Workshop Papers. New Delhi: UNESCO/UNICEF.

## 《講演会シリーズ紹介》

今年度から複数の年度にまたがる一連の講演会企画を「シリーズ」という名称でまとめ、実施していくこととした。さっそく動き出した3本のうち「Disability and Japan in the Digital Age Serie (デジタル時代における障がいと日本シリーズ)」と「現代中国における観光開発と社会変動シリーズ」の概要をそれぞれの担当者に紹介してもらおう。なおもう1本は「Asian Ethnology Series」(担当:ドーマン・ベンジャミン)である。

## Disability and Japan in the Digital Age Series / 「デジタル時代における障がいと日本シリーズ」紹介

ドーマン・ベンジャミン (人類学研究所)

この研究プログラムでは、日本における障がい研究を取り巻く中核的な問題を考察する。

具体的には1) 障がい研究、2) 耳の不自由な方の研究、3) その関連性と関わり、という3つの主題から構成する内容となっている。これらのユニットでは、法律、政策、教育、雇用、メディア、テクノロジー、ジェンダー、性などに関連した国内の発展と国際的な革新などを相互に検証し、その関係者が日本における障がいの概念をどのように構築するかを明らかにする。また、さまざまなバックグラウンドを持つ9人の研究者が、それぞれの専門性を活かして、一連のPodcastや講演を行い、日本の障がい者問題をテーマにした初の英語版編集本の出版を予定している。

本プログラムでは、Carolyn Stevens (2013)、Jennifer Robertson (2018)、立岩真也 (2018)、Karen Nakamura (2013) など、民族学的な調査や集計データ分析を用いて、障がい者コミュニティの内的な多様性を強調してきた日本における障がい者の人類学的分析について構築していく。Steven Fedorowicz、Jennifer McGuire、Karen Nakamura などの人類学者や、地域研究、メディア研究、法律研究、歴史などの研究者との対話を可能にすることで、日本における障がい人類学を学際的

なフレームワークの中に位置づけることができるであろう。

### 三部構成について

研究プログラムは以下3つの分野で展開していく。

1. Mark Bookman が各講演者(以下リスト参照)に Asian Ethnology Podcast インタビューを行い、各講演者のテーマを一般の聴衆に簡潔で分かりやすい形で紹介する。
2. Benjamin Dorman が各講演者と、前回の Podcast のインタビューを基にした Zoom ウェビナーを企画し実施する。
3. 登壇者がそれぞれの発表に基づいて、編集本に記事を執筆する。Podcast とウェビナーは、2020年11月から毎月実施しており、その内容を編集し発行する予定としている。

### 発表者

1. 障がい学(国内の発展、国際的な革新、法律、政策)
  - Nagase Osamu, Professor (Ritsumeikan University)
  - Ishikawa Jun, Professor (University of Shizuoka)

•Mark Bookman, PhD Candidate  
(University of Pennsylvania)

2. 耳の不自由な方の研究、(教育、雇用、メディア、テクノロジー)

•Frank Mondelli, PhD Candidate  
(Stanford University)

•Jennifer McGuire, Assistant Professor  
(Doshisha University)

•Steven Fedorowicz, Associate Professor  
(Kansai Gaidai University)

3. その関連性と関わり (ジェンダー、性、主観性、当事者)

参考文献

Nakamura, Karen

2013 A Disability of the Soul: An Ethnography of Schizophrenia and Mental Illness in Contemporary Japan. NY: Cornell University Press. (中村かれん 2014 『クレイジー・イン・ジャパン——べてるの家のエスノグラフィ』、石原孝二・河野哲也 (監訳)、医学書院。)

Robertson, Jennifer

2018 Robosapiens japonicus: Robots, Gender, Family, and the Japanese Nation. Berkeley: University of California Press.

Stevens, Carolyn

2013 Disability in Japan. London: Routledge.

立岩 真也

2018 「不如意の身体——病障害とある社会」、青土社。



第3回公開講演会 "Feed/back: How the Hearing Aid Molded a Regime of Rhythm in the Postwar Period (Disability and Japan in the Digital Age Series)" 2020.12.11.

## 《講演会シリーズ紹介》

# 「現代中国における観光開発と社会変動シリーズ」 紹介

張玉玲 (人類学研究所・外国語学部アジア学科)

特に2000年以降、中国政府による観光産業の本格的進展に伴い、各種の有形・無形文化が観光資源として発掘・復興・創造されていった。これによって、農村部と都市部がともに凄まじい経済的、社会的、文化的変動を見せてきた。講演会「現代中国における観光開発と社会変動」シリーズの狙いは、こうした各種の歴史や文化が「資源」として動員されていく過程を、現代中国の観光振興という文脈において捉えることと、観光開発によってもたらされた社会的、文化的変化とともに、経済的急発展による人々の価値観や意識の変容も含めた広義的な「社会変動」を様々な角度から見つめることにある。

1980～90年代の中国の観光産業は外貨の獲得、つまり経済的利益の獲得に特徴があるとすれば、2000年以降のそれは、より複雑な国際的、社会的背景と狙いがあるように思われる。まず経済面では、1979年以降の改革開放政策の実施に伴い、急速に「格差社会」が広がっていったことが挙げられる。地域間(東部>中部>西部)、民族間(漢族>少数民族)、都市と農村間(都市>農村)、職業間(ホワイトカラー>ブルーカラー)の経済的格差のみでなく、教育、福祉などの面でも大きな差異が存在しており、民衆の不満が「調和のとれた社会」作りの不安定要素として懸念されるなか、観光開発によってこうした格差を解消または縮小させる狙いがあった。第二に、各地域にある有形、無形な歴史的、伝統的資源を地域の観光振興に結び付けることで、経済的発展のみでなく、その代価として失われつつある中国の伝統文化の「救出・保護」ないし地域文化(国民文化)を確立させようとする目的があるように思われる。改革開放後の中国と諸外国との間では、資本、技術、情報など様々な分野における交

流が盛んとなり、それまでに「文化的侵略」として警戒されてきた西洋文化も、中国人に受容され人々の暮らしに入り込んでいった。一方、封建社会のシンボルとされ、長らく禁止、破壊の対象とされてきた中国の伝統文化(有形・無形ともに)は、1979年以降、急速な経済発展と国際化に伴い、完全にその姿を消しつつある。「西洋文明」に「浸食」されたなか、伝統と文化を復活させ、中国人としてのアイデンティティの再確立が唱導されたのである。第三に、地域の歴史や伝統および先住民や少数民族による文化を国家の文化財として保護し、観光客の誘致や国民統合のために活用する世界的な流れの中、観光というルートを通して、伝統文化を世界に発信することで国際社会における中国の知名度を上げようとする狙いもあるように考えられる。

キーワードである「観光開発」と「社会変動」が、互いに要因であり結果でもある、複雑な関係にあるほど、講演会のテーマ自体は大きいものとなっている。2020年度に実施した「中国における観光産業の発展とシルクロードの観光振興」(講師:兪嶸 静岡文化芸術大学准教授)、「『負の記憶』を観光資源に——四川汶川大地震後の農民の生業に着目する」(講師:王曉葵 南方科技大学社会科学高等研究院/社科中心教授)、「現代中国における古村鎮の『再発見』と『再創出』——ノスタルジアの顕在化」(講師:周星 神奈川大学国際日本学部/日本常民文化研究所教授)の3回では、それぞれ政策面、震災復興との関連そして古い村落の復興の側面から専門家に講演をいただいた。2021年度の講演では、観光開発にかかわる人々に着目し彼らの暮らしなどを見つめてみる。

## 沼澤喜市資料整理報告

湯屋秀捷 (南山大学大学院人間文化研究科)

2019年6月から2021年4月の期間で、人類学研究所所蔵の故沼澤喜市神父に関する資料の整理と目録作成作業を行った。この目録作成作業は、人類学研究所の宮脇千絵先生から依頼を受け、2019年度から2020年度にかけて南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻博士前期課程に在籍した黒川雛代氏と、現在も同課程に所属する筆者によって行われたものである。目録作成を行った資料の概要と、2019年度から開始した目録作成作業、その結果について報告する。

### 資料の概要

目録作成の対象になったのは、1949年から1973年まで南山大学で教鞭をとった沼澤喜市先生(1907～1980)の論文やその原稿、調査記録をはじめとした紙を中心とする資料群である。論文の原稿の他に、沼澤神父の手記や手紙、大学業務に関する書類など、その内容は多岐に渡る。沼澤資料は、封筒に入れられた状態で人類学研究所3階書庫に保管されていた。

2019年からはじまる整理作業以前に、沼澤資料はすでに分類作業が行われていた。無分類の状態から数年を費やして資料の分類が行われ、その結果、資料分類が多岐に渡り複雑化した。最終的に、封筒にアルファベットを注記する形で、整理作業は終了したようである。

2019年度の作業開始時の沼澤資料は、封筒にアルファベットによる分類が記載された形で書庫に置かれていた。例えば、論文に係る資料が入られた封筒はRという記号が与えられている。他の資料も同様に、資料の内容に即したアルファベットによる分類記号が付与されている。この分類に基づき、資料の入った封筒に分類記号と枝番号を注記し、それぞれの封筒を区別していた(論文資料の場合、R-1、R-2と続く)。また、作業の進行度によ

て資料分類の仕方が異なっているようである。

2019年度の目録作成作業開始当初は、封筒に注記されたアルファベットによる分類に基づいて、封筒の番号からさらに枝番号を付与し、封筒内の個別資料を区別しようとした。しかしながら、資料の入った封筒は入れ子状になっており、枝番号が冗長になってしまうこと、分類された資料の中に明らかに分類から外れる資料が存在すること、「要再考」となった資料が多いといった問題が明らかになった。これらの問題が目録の形態を複雑にすること、今後の再調査や整理作業、研究による資料群の再構成を困難にすることを懸念し、筆者が新たに作業方針を立てた。

### 資料整理の目的と方針

2019年度より開始された資料整理の目的は、全資料の目録作成を行い、資料活用を想定し、資料検索など資料へのアクセスが可能な状態にすることであった。そのため、目録には資料のタイトルや著者、作成年、出版社などの他に、資料形態と資料に関するキーワードの欄を作成した。

従来の分類による整理では、取りこぼしてしまう資料が多いことや、アルファベットによる分類と枝番号が非常に細かくなり、複雑な目録になってしまうことが



予測された。そこで、資料形態に絞った資料検索、スムーズな資料の所在確認や取り出し、作業が長期に渡り、担当者が変わった際の引継ぎを可能にするため（これは杞憂に終わった）に、沼澤資料が入れた封筒に通し番号を付与し、資料形態を新た

に設定した。新たに設定した資料形態は、これまでの資料分類を参考にしながら、それぞれ定義づけを行った。

以下は、筆者が行った資料形態の再定義と資料の概要である。

資料形態	概要
新聞	沼澤先生が書いた記事の切り抜きが中心。
論文	沼澤先生が書いたものも、そうでないものも含む。抜刷や複写を含め、1点の資料が1本の論文の場合。
刊行物	出版者、出版年が明記されているもの。主に冊子の形態をとる。
大学業務	他大学との連携事業に関するやり取りなど、研究とは直接関係しないが、大学との関連性が認められるもの。
FW 資料	FW 調査において使用されたもの、また使用されたと思しきもの。主に調査ノートや日誌が該当する。
写真	写真。一部デジタル化済みとあるが、詳細は不明。
手紙	沼澤先生の間わるものの他に、別の手紙も混在している。
地図	調査で使用したであろうもの、講義で使用したであろうもの、両者存在する。
原稿	基本的に手書きで書かれ、文章の体裁をなしているもの。
神言会	研究や大学との関連性の薄いもの。沼澤神父として活動していた際のもの。
研究資料	研究発表で用いたものや、研究に関する外部機関（テレビ局など）とのやりとり、番組の台本など。その他研究と関連性のあるメモなども含む。

沼澤資料目録の資料形態（筆者作成）

### 資料整理結果、作業の評価

2021年4月の作業をもって、沼澤資料の目録作成が完了した。封筒の総点数は497点を数える。資料形態の定義は暫定的なものに過ぎず、その妥当性や内容について今後再検討されるべきであろう。少なくとも、外部からのアクセスを容易にするために、資料分類を精査し、分類の定義づけを行った上で資料形態を設定した点、その資料形態と連動させるかたちで目録を作成した点はひとまずの成果といえるだろう。

また、実際に資料の情報を確認しながら、目録へ入力する作業のほとんどは黒川氏が行った。本資料整理作業において、黒川氏の果たした役割が非常に大きなものであることをここで述べておきたい。

なお、資料の来歴や今回の目録作成作業以前の資料整理に関する詳しい情報は、紙幅の都合上、稿を改めて報告したい。



沼澤資料の一部、調査時の日誌や地図など

## 特集

# 人類学フェスティバル 2020 ★オンライン

宮脇千絵 (人類学研究所)

毎年恒例の人類学フェスティバル。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2021年1月9日にオンラインで開催しました。オンライン開催は初の試みでしたが、一般公開の企画が2つと、学生によるポスター発表を無事におこなうことができました。

人類学フェスティバルは例年キリスト教センターを会場に、プラネタリウムやフィールドワーク実習の報告など複数のワークショップを訪問しながら楽しむ形式ですが、オンラインでの開催になったことに伴い、学生の発表を中心に据えることにしました。また初めての大学を越えた交流として、中京大学現代社会学部の岡部真由美先生のゼミ生にも参加をしてもらいました。

その結果、人類学研究所と人文学部人類文化学科(上峯篤史ゼミ、後藤明ゼミ、藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ)、外国語学部アジア学科(張玉玲ゼミ)、中京大学現代社会学部(岡部真由美ゼミ)そして南山大学チャレンジプロジェクト産学連携企画に携わる教員と学生による、初めての大学・ゼミを越えた交流となりました。コーディネイトは岡部真由美、藤川美代子、宮脇千絵がおこないました。

学生たちは10月ごろからそれぞれ発表の準備を開始しました。後藤ゼミの「星空人類学2020:アンソロポリウムの試み」は、学生がプラネタリウム解説班、ワークショップ班、展示班の3グループに分かれて、動画作成と配信をおこないました。撮影やナレーションにも工夫が凝らされ、充実した60分の動画となりました。一般公開され、のべ76名の方が視聴してくれました。

南山チャレンジプロジェクト産学連携企画「エチ

オピアと日本の食文化をつなぐボン菓子」(サポート:石原美奈子)では、エチオピアと日本の食文化からSDGsに取り組む学生グループが、亀田製菓と3コラボレーションし、エチオピアの人びとが好む味付けのボン菓子の開発と販売をおこなっていることを発表してくれました。新型コロナウイルスの影響で、予定していたエチオピア渡航は叶わなかったというものの、活動が着実におこなわれていることが伝わってきました。一般公開され35名の視聴があり、質疑応答も活発におこなわれました。

そして各ゼミの3年生が卒論に向けた研究発表をポスターにまとめ、発表をおこなった「ポスター発表&交流会」には藤川ゼミ、上峯ゼミ、張ゼミ、岡部ゼミの学生64名と教員9名が参加しました。学生が工夫をこらして作成したポスターは、2週間前にウェブサイト上へアップし、各々が冬休みのあいだに閲覧しました。当日は、セッションごとの司会や議事録も学生が担当し、zoomの画面越しではあったものの活発な議論が展開されました。

人類学フェスティバルは、ふだん学生指導には直接関わる機会の少ない人類学研究所にとって、学生の活動を間近に感じることでできるイベントです。中京大学との連携も実現した今年度をふまえ、今後もゼミや学部、大学を越えた学生と教員の交流の場を提供していきたいと思います。

## 「京都府最古の旧石器時代遺跡—京丹後市上野遺跡2020年夏期発掘調査速報—」

発表者らは、2020年の夏に実施した上野遺跡（京都府京丹後市）の発掘調査の成果を速報した。上野遺跡は約3万6000年前の遺跡で、京都府最古の遺跡とされる。この発掘調査は、海浜生活に適応したホモ・サピエンスの文化を明らかにすることを目的に、南山大学上峯研究室が実施した。ホモ・サピエンスは、約4万年前に日本列島に渡来したとされる。ユーラシア大陸内での拡散とは異なり、島嶼部へ適応した点で、ホモ・サピエンスの日本列島への拡散は世界的に注目されている。今回の発掘調査では、始良Tn火山灰（約3万年前）より下位から複数の石器が出土し、石器の年代を決定することができた。また、発表者らにとって本格的な発掘調査は初めての経験であったが、この調査を通して、考古学的データを得るための学術的な発掘調査方法を初歩から習得できた。

発表するだけでなく、他の発表を聞くことも有意義であった。異なる分野であっても、自分の研究に活かせる良い点や指摘を学べた。また、他分野の同級生の関心に触れることができ、新鮮であった。

南山大学人文学部人類文化学科 上峯ゼミ 村瀬早紀

## 「岐阜県下呂市湯ヶ峯流紋岩原産地のグループ研究—第1報—」

私たち上峯ゼミ 2期生は、考古学的手法に基づいた湯ヶ峯・下呂石の研究とその成果についてポスター発表をした。石器時代の道具の材料として利用されてきた下呂石を産出する湯ヶ峯には、これを採取しに来た人類の活動痕跡が残っているはずである。しかし石材原産地としての湯ヶ峯の実態は、未だ明らかになっていない。人類の活動を解明するために、丁寧な現地踏査と遺物研究が求められる。私たちは調査の結果、石刃や尖頭器といった旧石器時代から縄文時代初頭の遺物に加え、下呂石製の剥片が湯ヶ峯に多量に分布する実情を確認した。

質疑応答の場面では、現地踏査の意義と方法の点から、成果の本質を問われた。研究の質をより高める絶好の機会になった。他の学生による発表の場では、発表者が質問・意見に対して答えるべく、熱弁を奮っている様子が印象的だった。多様な意見を突きつけられることで、他の学部生も自身の研究を見つめ直すことができたと思う。

南山大学人文学部人類文化学科 上峯ゼミ 村井咲月

自分の発表については、たくさんの方に質問をしていただけてすごく有意義な時間になりました。私のポスターに興味を持っていただけたのも嬉しかったですし、質問に答えることで自分の考えや今後やるべきことを見つめ直すことができたので良い機会でした。ダークツーリズムや公害について研究して終わりではなく、その研究どう実際に活用していくべきか、についても今後考えていきたいと思いました。

司会についても、なかなか普段できないことなので良い経験になりました。欠席者がいて焦りましたが、藤川先生がサポートしてくださりなんとか進めることができました。またグループ発表があったため参加者が多く、質疑応答が活発に行われたのも幸いでした。時間のやりくりやトラブルも含め、その場をうまく回すことの難しさを知ることができ、良い勉強になりました。加えて同じグループ内の発表について、ジェンダー差という比較的最近の問題を挙げる方がいる一方で、旧石器時代や弥生時代の石器をテーマにしている方がいて、こんなにも関心を持つ領域が違うのかと驚きました。

人類学フェスティバルを通して他学科、他大学、他ゼミの方々と交流することができ、同世代の人がどんなことに問題意識を持っているのか、どんな研究をしているのかを知ることができて視野を広げる良い機会になりました。

南山大学外国語学部アジア学科 張ゼミ 伊藤結美

今回人類学フェスに参加したことで感じたことは、2つあります。

まず、自分の卒論の軸をよりはっきりさせることができました。自分の卒論のテーマをポスター発表という形で表すことで、具体的な方向性や自分の関心について考え直すことができました。なぜなら、いくつかの項目に分けて整理することで、より明確な研究項目や方法について考え直すことに繋がったからです。例えば、私は「インドネシア華人のアイデンティティ」について興味を持っていましたが、先行研究の多さゆえにオリジナリティを見つけることが困難だと感じていました。しかし、ポスター制作を通して、自分の切り口を見つけることができました。

次に、質疑応答の時間を通して、自分の課題や勉強が必要な点を自覚することができました。ポスター制作のなかで明らかになったテーマや方向性を実現するためには、どのような知識を深めるべきか確認することができました。

自分が所属するゼミ生以外の意見をもらえる機会は貴重で、卒論の進め方や軸につながるよい経験となりました。

南山大学外国語学部アジア学科 張ゼミ 山本紗瑛

「日韓の文化（エンターテインメント）から見る社会の違い」と題し、今回の発表では時間の関係でガールグループに着目しまとめた。

私のポスターでは事前情報が十分でない中、Vチューバーに着目するのも面白そうという意見や、韓国は音楽を産業として力を入れているため産業の面から情報を調べていくと有効なのではという意見を頂いた。このことで、自分は何の疑問も持たずアイドルにフォーカスしていたが、その理由を明確にしなければならないという意識が生まれた。またアイドルについての文献は多くは無く、有益な情報をどう集めるか想像がついていなかったのでアドバイスはとても参考になったし、「産業」という捉え方も自分にとっては新しかった。

フェスティバルに参加したことで客観的な意見を頂くことができ有意義な時間になったと思う。他の方の内容も整形や地域に住む外国人など興味深いものが多くとても面白かった。

南山大学人文学部人類文化学科 宮沢ゼミ 押田有加

卒業論文に向けての発表ということで、それまで広く出ても自分の所属ゼミの中でしかしてこなかったことを他ゼミや他学科、他大学の方々と共有し意見を交換する場に参加することができて有難い機会でした。自分の発表をするにしても、他の人の発表を聞くにしてもこれだけの人が集まってそれぞれ異なっているということが新鮮で楽しんで参加させていただきました。また事前準備も行ってたとはいえ自分の発表の後には反省点がいくつも出てくるものですから、今後の課題や個人的な口頭発表の癖も今回の参加から掴むことができました。参考になる発表や質問の仕方など吸収し今後に生かせればと思います。

オンライン開催となった今回的人类学フェスティバルではありましたが、オンラインではなかったらできなかった出会いもあったと考えています。有意義な時間となりました。参加させていただき感謝いたします。

南山大学人文学部人類文化学科 宮沢ゼミ 山田真紀

私は、「己の考えを常に疑い続けること」が重要だと思っている。己の考えだけで突っ走ってしまうと、他者に自分の考えや理想を押し付けたり、結局的な外れな結果が出てくることもありえる。特に「他者へ自分の考えや理想を押し付ける」ということに関しては、人類学がその危険性を顕著に孕んでいると思う。

だから、「己の考えを疑う」ために、人類学フェスのような「他者の意見を聞く」催しは貴重である。私も、実際に人類学フェスへ参加し、他ゼミ、他学部、他大学の人々の意見を聞き、発表し、発表され、交流することができた。他者の意見を聞くことができた。普段は全く関わりがない人々と関わり、意見を交換するというのは、素晴らしい経験であり、その次に繋がる。

だから、こういった人類学フェスのように地道な交流が、人類学において、他者の理解にも、自己の研鑽にも、ひいてはそれが社会・学問の発展にも繋がると信じている。

南山大学人文学部人類文化学科 藤川ゼミ 三井柚奈

星空人類学（南山大学人文学部人類文化学科 後藤ゼミ）

（解説班 遠藤優佳）

各地域の文化における星の見方の違いを、私たち自身も楽しく学ぶことができました。そして、それをいかにうまく伝えられるかを考え、参加者の方に少しでも楽しく快適な時間を過ごして頂けるように、語り方やテロップの大きさ、音楽にこだわりました。その結果、ご視聴頂いた方から、想像以上だった！というような賞賛の声を頂くことができ、コロナ禍で制約のある中でも班員と協力し、試行錯誤しながら一つの満足のいく作品を作り上げることができたことに喜びと達成感を感じています。

（展示班 川上哲平）

私たちは展示班として、東海地方における神社と天体との関わりについて研究を行いました。コロナ禍のこともあって、準備も中々進まず、発信にしてもオンラインで行うなど、不安な場面が多々ありました。しかし、こうした中で先生のサポートやメンバーの工夫によって、一つのものを作り上げることができました。特に、コロナ禍の中でも、少人数でフィールドワークを行い、ここで得たものを映像に起こせたことが良かったです。これからはしばらくこうした状況が続くかもしれませんが、こうした時期だからこそできることを探して、様々な挑戦を行なっていきたいです。

（ワークショップ班 加藤京子）

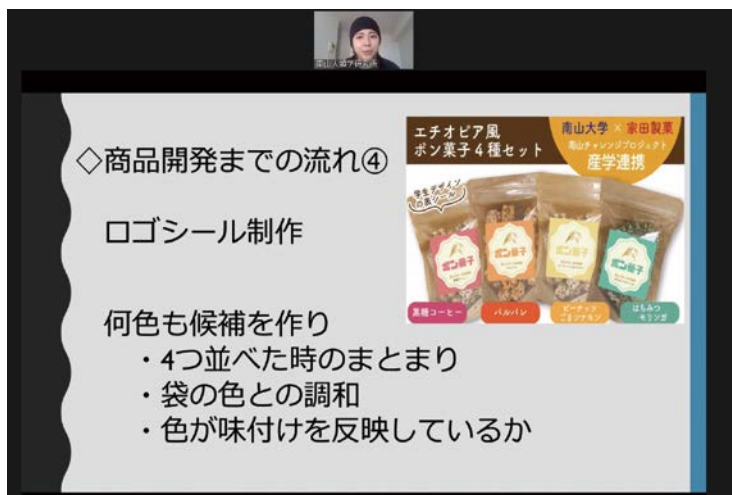
私たちWS班は『惑星チョコ作り！』を企画作成しました。毎年の対面で楽しんで頂けてる様に、今年も楽しく視聴出来る事を軸に動画ならではの見た目に拘った色彩豊かなチョコに加えて、惑星についての豆知識を盛り込みました。より現実的な惑星に近づける為に何度も試作を重ね、飽きさせない編集によって完成した動画はオンラインでの新しいWSの新たな流れを作りました。

他大学のゼミ生とオンラインではありますが、交流する場があり、はじめは非常に緊張したのだが、ポスターのQ&Aで南山大学の方々から、沢山の質問を貰い、今後のゼミ論に活かしていきたいものが多く、参加できてよかったなと素直に思いました。また、Webインターンシップで鍛えられたオンライン上でのコミュニケーションも難なくできた点は、非常に良かった点だと思いました。

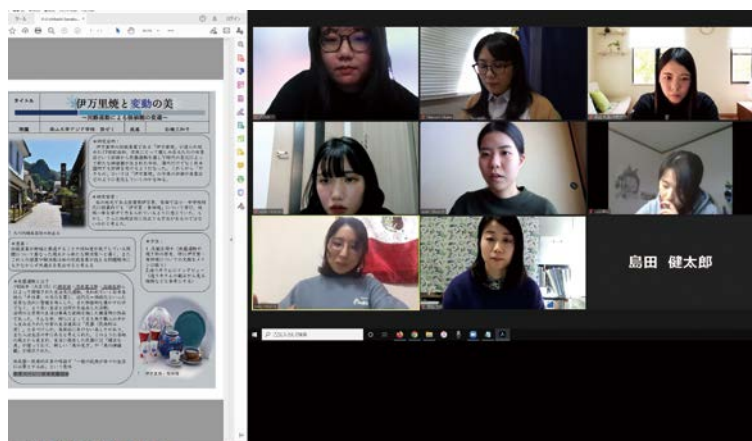
中京大学現代社会学部 岡部ゼミ 岩崎圭一郎

ゼミで得たものとは違う角度での質問や意見がもらえて面白いと思った。

同 富松佑菜



南山チャレンジプロジェクト産学連携企画 「エチオピアと日本の食文化をつなぐポン菓子」



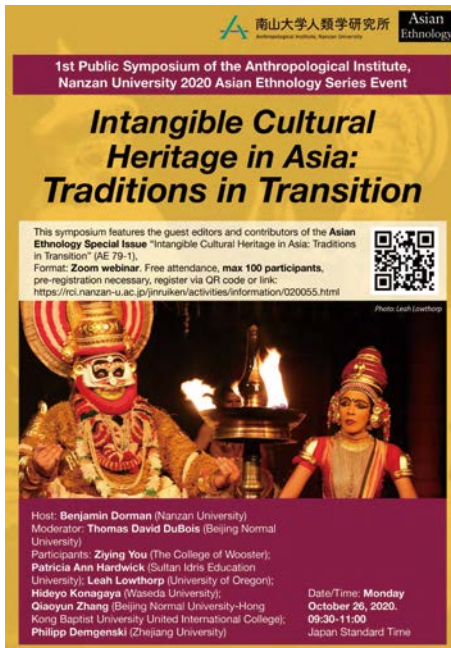
# 活動報告 【2020年度】

## シンポジウム

第1回 公開シンポジウム  
Intangible Cultural Heritage in Asia :  
Traditions in Transition  
(Asian Ethnology Series 2)

Qiaoyun Zhang (Beijing Normal  
University-Hong Kong Baptist  
University United International  
College)  
Philipp Demgenski (Zhejiang  
University)

11:00 Q&A



68 attendees participated in this symposium, in which each panelist responded to questions from the moderator. Some of the discussion included considerations about what was happening in various regions concerning COVID and the impact it was having on festivals and sites. There were a number of questions raised in the symposium.

今回のシンポジウムには Asian Ethnology 79-1/ 特集号「アジアの無形文化遺産」のゲスト編集者と寄稿者をお招きし、各パネリストが司会者の質問に答える形で進行した。移行期における伝統文化について論じ合い、議論の中では、「新型コロナ」について、各地域で何が起きているのか、フェスティバルや現場にどのような影響をもたらしているかなどが考察された。講演は英語で行われ、参加者は68名であった。

(ドーマン ベンジャミン)

- 日時 2020年10月26日(月) 9:30 ~ 11:30
- 会場 Zoom Webinar (オンライン)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 司会 Thomas David DuBois (Beijing Normal University)
- プログラム 9:30 Introduction Benjamin Dorman (Nanzan University)  
9:35 Symposium Participants  
Ziyang You (The College of Wooster)  
Patricia Ann Hardwick (Sultan Idris Education University)  
Leah Lowthorp (University of Oregon)  
Hideyo Konagaya (Waseda University)

## 第2回 公開シンポジウム バイオアーケオロジーの最前線



日時	2021年3月5日(金) 13:30 ~ 15:50
会場	Zoom Meeting (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
協力	科学研究費補助金・基盤研究(B) 南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究
司会	渡部森哉
プログラム	<p>13:30 「趣旨説明」 渡部森哉(南山大学人類学研究所・所長)</p> <p>13:40 「バイオアーケオロジーから見た古代アンデスの病気と死」 長岡朋人(聖マリアンナ医科大学・准教授)</p> <p>14:40 休憩</p> <p>14:50 「古代DNAの最前線—遺跡資料から分かること—」 澤藤りかい(日本学術振興会・特別研究員 CPD (総合研究大学院大学))</p>

まず趣旨説明として、渡部が科研費プロジェクト「南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究」の概要、およびプロジェクトにおける自然人類学的アプローチの目的について説明した。

長岡氏は、ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡(前1200-500年)から出土した人骨を事例として肉眼分析、および顕微鏡分析の結果を報告した。齧歯、頭蓋変形などの証拠と、当時の社会の階層制の関係について論じた。またカットマークなどの証拠から儀礼的暴力があったと考えられるとした。

分子生物学を専門とする澤藤氏は、骨の古代DNA、古代タンパク質、歯石から健康、食物、環境をどのように復元するのかについて解説した。そして日本の江戸時代の資料の事例を提示した。骨自体以外に、土壌、糞石、土器の付着物などにも応用される手法であり、今後のアンデスの資料の分析結果が楽しみである。

当日は30名の参加者があった。コロナが収まり次第、対面形式で国際シンポジウムを開催したいと考えている。

(渡部森哉)

## 第3回 公開シンポジウム Symposium on Indigenous Calendars used in Asia (West-, South-, Southeast-, East-) and Oceania (The Integration of Astronomy and Anthropology Symposium No.4)

日時	2021年3月15日(月) 12:25 ~ 16:40 2021年3月16日(火) 12:30 ~ 16:30
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	国立天文台, 南山大学人類学研究所
共催	中部人類学談話会, 「新学術領域研究」 科研費
司会	相馬充・谷川清隆・後藤明
プログラム	<p>2021 March 15 12:25-16:40</p> <p>12:25 "Opening Address" (開会の辞)</p> <p>12:30 Liliana Clarke (Te Kereu Associates and Society of Maori Astronomy Research and Traditions (SMART), New Zealand) "Luni-solar Calendar of Maori"</p> <p>13:10 Ramasubramanian Krishnamurthi (IIT, India) "Traditional Luni-solar Calendars of India" (Review)</p> <p>13:50 Prof. Chen Yiwen 陈懿文 (Northwest Univ., China) "Evolution of Chinese Calendars" (Review)</p> <p>14:50 Miss Zhang Penglei 张鹏雷 (Northwest Univ., China) "A Calendar not adopted officially in China"</p> <p>15:30 Takuro Furusawa 古澤拓郎 (Kyoto Univ., Japan) "Indigenous Calendars in Western Sumba Island, Indonesia: Signals for 'Bitterness' and 'Sea</p>



Worms" (インドネシア・スンバ島の  
曆におけるシグナルの伝達)

16:10 Ramasubramanian Krishnamurthi  
(IIT, India)  
"Tribute to the memory of late  
Yukio Ôhashi"

2021 March 16 12:30-16:00

12:30 Yoichi Isahaya 諫早庸一 (Hokkaido  
Univ., Japan)

"From Alamut to Dadu: Bîrûnî on  
the Mongol Silk Roads." (アラム  
ートから大都へ：モンゴル帝国期のシル  
クロードをゆくビールーニー)

13:10 Lee Eun-Hee (Yonsei Univ., Korea)  
"Korean version of Chinese-  
Islamic calendar, Chiljeongsan  
Oepyeon" (七政算外篇)

13:50 Makibi Nakano 中野真備 (Kyoto  
Univ., Japan)

"Seasonal Cognition by Sama-  
Bajau People: Focusing on  
the Wind Classification in the  
Banggai Islands, Indonesia" (サマ  
人の季節認識：インドネシア・バンガ  
イ諸島における風の季節区分に着目し  
て)

14:50 Akira Goto 後藤明 (Nanzan Univ.,  
Japan)

"Indigenous calendar of Oceanic  
seafarers" (オセアニア航海民の曆)

15:30 Mohammad Bagheri (University  
of Tehran, Iran)

"Ancient Iranian Calendars"

16:10 Yoshitaka Hojo 北條芳隆 (Tokai  
Univ., Japan)

"A primitive calendar used by  
prehistoric farmers in Japan" (弥  
生時代の曆)

本シンポジウムは文明ないし文化間の曆法の比較を行うことを目的とした。とくに東アジア、南アジア、東南アジアとオセアニア地域において使われていた古代の曆、現在ないし近年まで生活の一環で使われていたグレゴリオ曆以外の歴史的曆について、各自が講演し、議論を行い、交流を深めるのを目的としていた。曆の地域性は用いる星座の違いにも起因する。シンポジウムでは異なる曆の起源および曆の地域性について論点を絞って行われた。

(後藤明)

# 公開講演会

## 第1回公開講演会

**Disaster, Disability, and Design in Japan:  
Reflections on Accessibility from 3/11 to**

**COVID-19/**

**3.11 からコロナウィルス感染拡大における災害、  
障がいと日本における Inclusive Design (包括的  
設計) を考察して**



日時 2020年7月31日(金) 17:00～18:30

会場 Zoom Webinar (オンライン)

主催 南山大学人類学研究所

講師 Mark Bookman (University of Pennsylvania)

司会 Benjamin Dorman

使用言語 英語(日本語による逐次通訳あり)

プログラム 17:00 Introduction : Benjamin Dorman  
(Anthropological Institute)

17:05 Lecture : Mark Bookman(University  
of Pennsylvania)

Mark Bookman's lecture focused on how the spread of COVID-19 across Japan has exacerbated accessibility issues born out of the nation's past. The lecture was conducted

in English with Japanese interpreting by Tomoko Murayama. 74 people participated in the lecture.

In addition to its practical contributions for persons with disabilities in Japan and elsewhere, the lecture helped to situate the anthropology of disability in Japan within multidisciplinary frameworks. It showed how legal and policy studies of disability provide an idealized image of welfare that does not always correspond with lived realities as evidenced by ethnographic inquiry. It also revealed how the "lives realities" of disability are framed in media discourse, and highlighted the historical underpinnings that govern that discourse and its implications for various stakeholders. There were a total of 15 questions asked during the webinar, 5 of which Mr. Bookman was able to respond during the lecture due to time constraints. Participants whose questions did not receive responses during the live event were invited to submit questions via email, which one person did.

(Dorman, Benjamin)

## 第2回公開講演会

## Why Does Bhujangabhushan Sing? (Asian Ethnology Series Inaugural Event)



- 日時 2020年9月18日(金) 17:00～18:30
- 会場 Zoom Webinar (オンライン)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 講師 Frank Korom (Boston University/Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity)
- 司会 Benjamin Dorman (Anthropological Institute)
- 使用言語 英語
- プログラム
  - 17:00 Introduction : Benjamin Dorman (Anthropological Institute)
  - 17:05 Lecture : Frank Korom (Boston University/Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity)
  - 17:45 Respondent : Sumahan Bandyopadhyay (Vidyasagar University, West Bengal)
  - 18:05 Q&A

Frank Korom's lecture focused on the Bengali Brahman Bhujangabhushan, whose performances of passages of relatively inaccessible medieval texts bring key elements of it to life for the audience. Through his entertaining performance, Bhujangabhushan connects the audience to spiritual concepts

that are shared between them. 36 participants attended the lecture.

当講演会は、ベンガル地方の Bhujangabhushan にフォーカスし、比較的近づきたい中世のテキストの一節を演奏することで、その重要な要素を観客に伝え、パフォーマンスを通して、観衆の間で共有されている精神的な概念へと繋がるという内容であった。講演は英語で行われ、参加者は36名であった。(ドーマン ベンジャミン)

## 第3回公開講演会

## Feed/back : How the Hearing Aid Molded a Regime of Rhythm in the Postwar Period (Disability and Japan in the Digital Age Series)



- 日時 2020年12月11日(金) 8:00～9:30
- 会場 Zoom Webinar (オンライン)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 講師 Frank Mondelli (PhD Candidate, Stanford University)
- 司会 Benjamin Dorman (Anthropological Institute)
- 使用言語 英語
- プログラム
  - 8:00 Introduction : Benjamin Dorman (Anthropological Institute)
  - 8:05 Lecture : Frank Mondelli (PhD Candidate, Stanford University)
  - 8:50 Comment/Response : Mark Bookman (PhD Candidate, University of Pennsylvania)
  - 9:05 Q&A

This talk, the first in the “Disability in the Digital Age in Japan Series,” was attended by 18 participants.

当講演会は、第一回“Disability in the Digital Age in Japan Series”であり、戦後日本において、補聴器がいかにしてリズムの秩序を形成したかについての内容であった。講演は英語で行われ、参加者は18名であった。

(ドーマン ベンジャミン)

**第4回公開講演会**  
**中国における観光産業の発展と**  
**シルクロードの観光振興**  
**(「現代中国における観光開発と社会変動」シリーズ No.1)**



- 日時 2020年12月12日(土) 14:00～15:30
- 会場 Zoom Webinar (オンライン)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 講師 兪嶸(静岡文化芸術大学・准教授)
- 司会 宮脇千絵(南山大学・准教授)
- 使用言語 日本語
- プログラム 14:00 「趣旨説明」張玉玲(南山大学・教授)  
 14:05 講演「中国における観光産業の発展とシルクロードの観光振興」兪嶸(静岡文化芸術大学・准教授)  
 15:15 質疑応答

人類学研究所主催第4回公開講演会「中国における観光産業の発展とシルクロードの観光振興」は2020年12月12日(土)に行われ、静岡文化芸

術大学兪嶸氏に、中国の観光産業について経済学の視点からお話をいただいた。具体的には、インバウンド、アウトバウンド及び中国人の国内旅行の三つの角度から中国の観光産業の発展を概観した上で、2014年に世界遺産に登録された古くからの東西文明交流の道「シルクロード」の沿線地域の観光振興の実態について紹介していただいた。「現代中国における観光開発と社会変動」シリーズでは、2000年以降中国政府による本格的観光振興の下で、各地域の歴史・文化が観光資源として動員されていく過程における社会的変動の諸相をとらえることを目的としており、今回の講演からはその全体像をつかむための重要な手掛かりを得ることができた。尚、講演には、南山大学の教職員、学生に、学外の研究者、学生計25名が参加者された。

(張玉玲)



**第5回公開講演会**  
**Book talk – Urban Migrants in Rural**  
**Japan: Between Agency and Anomie in a**  
**Post-growth Society**  
**(Asian Ethnology Series No. 3)**



日時	2021年2月22日(月) 17:00～18:30
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
講師	Susanne Klien (Hokkaido University)
司会	Benjamin Dorman (Anthropological Institute)
使用言語	英語
プログラム	17:00 Introduction : Benjamin Dorman (Anthropological Institute)

17:05 Lecture : Susanne Klien (Hokkaido University)
17:50 Comment/Response : Gordon Mathews (Chinese University of Hong Kong)
18:10 Q&A

70 people in total participated in this webinar, which generated a large number of questions, many of which could not be answered due to time constraints.

書籍「*Urban Migrants in Rural Japan*」の著者による講演会を英語で行った。参加者は70名。質疑応答において沢山の質問や意見があり、所定の時間内では対応しきれず、改めて本人より回答を頂く形となった。

(ドーマン ベンジャミン)



## 第6回公開講演会 「負の記憶」を観光資源に： 汶川大地震後の 農民の生業に着目する 〔現代中国における観光開発と社会変動〕シリーズ No.2

日時	2021年2月25日(木) 17:00～18:30
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
講師	王曉葵(南方科技大学社会科学高等研究院/社科中心・教授)
司会	宮脇千絵(南山大学・准教授)
使用言語	日本語
プログラム	17:00 「趣旨説明」 張玉玲(南山大学・教授) 17:05 講演「「負の記憶」を観光資源に—汶川大地震後の農民の生業に着目する—」 王曉葵(南方科技大学社会科学高等研究院/社科中心・教授) 18:20 質疑応答

人類学研究所主催第6回公開講演会『「負の記憶」を観光資源に—四川汶川大地震後の農民の生業に着目する』は2021年3月11日(木)に行われた。中国・南方科技大学社会科学高等研究院/社科中心教授王曉葵氏が講師を務め、2008年5月12日に中国四川省汶川大地震で被災し、土地を失った農民たちの生計、被災地の復興と観光業の変容、そして、個人と政府(国家)による被災経

験・記憶の表象の相違などについて、現地で行われてきたフィールドワークと緻密な分析に基づいて、お話いただいた。被災地と被災者の個々の記憶が復興過程における国家の役割の強調に置き換えられたこと、人類学者による人々の生活空間への研究と介入の必要性などについても指摘された。南山大学も含め、日本全国の大学・研究機関から教員、学生及び社会人計32名が参加し、講演の後、活発な議論も行われた。

(張玉玲)



**第7回公開講演会**  
**現代中国における**  
**古村鎮の「再発見」と「再創出」:**  
**ノスタルジアの顕在化**  
**(「現代中国における観光開発と社会変動」シリーズ No.3)**

- 日時 2021年3月21日(日) 13:30～15:00
- 会場 Zoom Webinar (オンライン)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 講師 周星(神奈川大学国際日本学部/日本常民文化研究所・教授)
- 司会 宮脇千絵(南山大学・准教授)
- 使用言語 日本語
- プログラム 13:30 「趣旨説明」張玉玲(南山大学・教授)  
 13:35 講演「現代中国における古村鎮の「再発見」と「再創出」—ノスタルジアの顕在化—」周星(神奈川大学国際日本学部/日本常民文化研究所・教授)  
 14:50 質疑応答

人類学研究所主催第7回公開講演会「現代中国における古村鎮の「再発見」と「再創出」—ノスタルジアの顕在化」は、2021年3月21日(日)13:30～15:00 ウェビナーにて行われた。大規模な都市化と経済発展がもたらした急激な社会変化と将来の不透明さへの焦慮・不安から「美化された」過去に「桃源郷」的癒しと心のより所を求めようとする都市住民の希求(「ノスタルジア」と、都市開発によって失われた歴史、伝統的建築物・景観を文化遺産として保護すべく一連の保護、復興政策を打ち出した中央政府、そして地域の経済発展とブランドづくりを狙う地方政府の思惑が一致したところで、中国各地で「古村鎮」(古い街並み)が次から次と「発見」され、作り出されていく経緯、現状と問題点などについて、神奈川大学国際日本学部教授周星先生にお話をいただいた。28名の参加者がいて、講演後に興味深いコメント・質問が寄せられた。

(張玉玲)



# 人類学フェスティバル

## 「人類学フェスティバル」2020 ★ ONLINE



日時	2021年1月9日(土)、10:30~16:15
会場	Zoom Webinar, Zoom Meeting
主催	人類学研究所
共催	南山大学人文学部人類文化学科・外国語学部 アジア学科・中京大学現代社会学部
コーディネイト	岡部真由美・藤川美代子・宮脇千絵

毎年恒例の人類学フェスティバル、今年はオンライン開催となった。人類学研究所と人文学部人類文化学科、外国語学部アジア学科、中京大学現代社会学部そして南山大学チャレンジプロジェクト産学連携企画に携わる学生たちが共同で運営するイベントとなり、初めての大学・ゼミを越えた交流となった。

## 星空人類学 2020 : アンソロポリウムの試み Presented by 後藤明ゼミ (人類文化学科/人類学研究所)



会場	Zoom Webinar
時間	① 11:40~12:40 ② 15:10~16:10

後藤ゼミの学生が3グループに分かれて動画作成、動画配信をおこなった。プラネタリウム解説班は南山大学の空から出発し北海道と沖縄、ポリネシアとインカの星空を映し出し、美しいナレーションで解説をおこなった。ワークショップ班は、七夕にかかわる逸話や名古屋近郊の神社を紹介した。展示班は、惑星を象ったチョコレートを作成し、少し早いバレンタインとして後藤先生にプレゼントをする演出。コロナ禍にあって学生たちが創意工夫しながら取り組んだ成果を、76名の方(2回開催ののべ人数)が視聴してくれた。

南山大学チャレンジプロジェクト産学連携企画  
 「エチオピアと日本の食文化をつなぐボン菓子」  
 Supported by 石原美奈子 (人類文化学科/人類学研究所)

かったとのことだが、家田製菓さんとのコラボレーションで、エチオピアの人々が好む味付けのボン菓子の開発し販売をおこなった。35名の方々が視聴してくれ、ボン菓子に加工可能なエチオピアの穀物についてなど活発な質疑応答もおこなわれた。今後の活動にも期待です。

「ポスター発表&交流会」

Presented by 藤川美代子ゼミ (人類文化学科/人類学研究所)、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ (以上、人類文化学科)、張玉玲ゼミ (アジア学科/人類学研究所)、岡部真由美ゼミ (中京大学現代社会学部)



会場 Zoom Webinar

会場 Zoom Webinar  
 時間 13:50 ~ 14:20

各ゼミの3年生が卒論に向けた研究内容をポスターにまとめ、それをもとに大学、ゼミを超えての質疑応答をおこなった。セッションごとに司会や議事録も学生が担当し、画面ごしではあったものの活発な議論が展開された。ふだん聞くことのない他の学生の発表は、それぞれ個性豊かで、互いに良い刺激になっただろう。一般には非公開だったが、学生64名、教員9名の参加となった。

エチオピアと日本の食文化からSDGsに取り組む学生グループが成果発表をおこなった。コロナ感染拡大により、予定していたエチオピア渡航は叶わ

詳しくは、特集ページをご覧ください。



プログラム 2021年1月9日 (土) 10:30~16:15

開会の挨拶 (京都造形・人類学研究所・所員)			
10:30	A-1 司会: 菊池桃子 (同ゼミ) 議事録: 伊藤有彩 (同ゼミ) ホスト: 宮崎千尋	B-1 司会: 三井祐奈 (同ゼミ) 議事録: 山本幸太郎 (上峯ゼミ) ホスト: 岡部真由美	C-1 司会: 島田健太郎 (同ゼミ) 議事録: 山村早穂 (張ゼミ) ホスト: 藤川美代子
10:35	富松佑菜 (同ゼミ)	三浦友希 (同ゼミ)	原田穂乃里 (同ゼミ)
10:50	伊藤結美 (張ゼミ)	大谷秋乃 (張ゼミ)	丸田彩乃 (張ゼミ)
11:05	早川愛那 (張ゼミ)	山田真紀 (張ゼミ)	押田有加 (宮沢ゼミ)
11:20	河合里奈子 (張ゼミ)		村井咲月、村瀬早紀、鈴木しゅん菜、吉田真優 (上峯ゼミ)
11:35	休憩 (5分)		
11:40	『星人類学2020: アンソロロジムの試み』(後藤ゼミ)1回目 (60分) 安藤大智・海老原京・遠藤優佳・市原万利子・伊藤大成・加藤女子・川上智平・別荘杏穂・尾関久美子・坂口美優・鈴木文菜・吉田史臣 (菅沼文乃 (OG)・丹羽悦子 (研修生))		
12:40	休憩 (5分)		
12:45	A-2 司会: 大谷秋乃 (張ゼミ) 議事録: 鈴木しゅん菜 (上峯ゼミ) ホスト: 上峯篤史	B-2 司会: 高橋美央 (同ゼミ) 議事録: 林詠子 (張ゼミ) ホスト: 石原美奈子	C-2 司会: 村瀬早紀 (同ゼミ) 議事録: 鈴木結衣 (同ゼミ) ホスト: 後藤美生
12:45	近藤生 (同ゼミ)	竹内美帆 (同ゼミ)	三井祐奈 (同ゼミ)
13:00	赤川南 (同ゼミ)	米原匠穂 (張ゼミ)	高橋美央 (張ゼミ)
13:15	岩崎圭一郎 (同ゼミ)	池村綾都 (同ゼミ)	伊藤有彩 (同ゼミ)
13:30	谷口夕紀 (張ゼミ)	吉田祐奈 (張ゼミ)	田中優衣 (張ゼミ)
13:45	休憩 (5分)		
13:50	南山大学チャレンジプロジェクト産学連携企画 『エチオピアと日本の食文化をつなぐボン菓子』(サポート: 石原美奈子) (30分) 船橋南帆、松葉夕季、長川夕奈、岩田希子、石橋みんと、木下華		
14:20	休憩 (5分)		
14:25	A-3 司会: 秋山啓真 (同ゼミ) 議事録: 三橋三智子 (張ゼミ) ホスト: 宮崎千尋	B-3 司会: 竹内美帆 (同ゼミ) 議事録: 押田有加 (宮沢ゼミ) ホスト: 宮崎千尋	C-3 司会: 山田真紀 (張ゼミ) 議事録: 近藤美生 (同ゼミ) ホスト: 三浦友希
14:25	山本紗菜 (張ゼミ)	山村早穂 (張ゼミ)	林詠子 (張ゼミ)
14:40	菊池桃子 (同ゼミ)	山崎章吾 (同ゼミ)	田村享菜 (同ゼミ)
14:55	高橋美央 (同ゼミ)	鈴木結衣 (同ゼミ)	上川貴大 (同ゼミ)
15:05	休憩 (5分)		
15:10	『星人類学2020: アンソロロジムの試み』(後藤ゼミ)2回目 (60分) 安藤大智・海老原京・遠藤優佳・市原万利子・伊藤大成・加藤女子・川上智平・別荘杏穂・尾関久美子・坂口美優・鈴木文菜・吉田史臣 (菅沼文乃 (OG)・丹羽悦子 (研修生))		
16:10	閉会の挨拶 (宮崎千尋: 人類学研究所・第一種研究員)		
16:15	終了		





# 共催講演会

## 中国残留日本人の歴史と体験

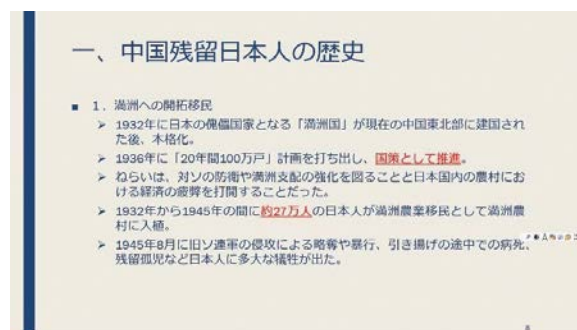
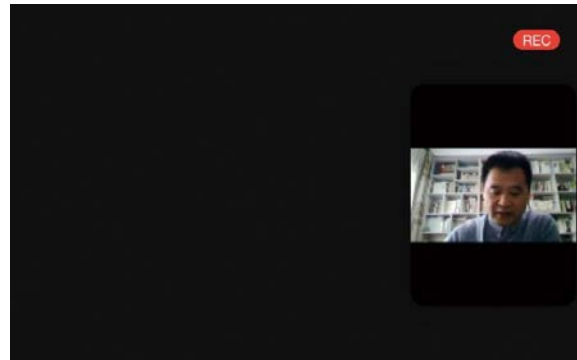
まで日中両国で実施してきたフィールドワークに基づいてお話しいただいた。

(張玉玲)



日時	2021年1月13日(水) 11:05 ~ 12:35
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学外国語学部アジア学科
共催	南山大学人類学研究所
講師	趙彦民(大連外国語大学日本語学院・教授)
司会	張玉玲(南山大学・教授)
使用言語	日本語

2021年1月13日(木)、外国語学部主催、人類学研究所共催講演会「中国残留日本人の歴史と体験」は行われた。講師は中国大連外国語大学日本語学院教授趙彦民氏が務めた。1945年日本の敗戦に伴い、中国東北地方に送り出された日本人開拓団の生活は日常から非日常へと転化し、難民生活に陥っていた。そのなかで、様々な理由により日本に引揚げることができず、1972年の日中国交正常化まで中国に残留せざるを得なかった人が多くいた。いわゆる「中国残留孤児」、「中国残留婦人」と呼ばれる中国残留日本人である。こうした人々の「残留」の体験とともに、長らく日本社会から忘れ去られ、数十年間異国で生きてきた歴史を、趙彦民氏にこれ



# 共同研究会

## 人類学研究所共同研究

### 「人類学・考古学の

### 「大きな理論」と「現場の理論」

(2019～2021年度)

代表：宮脇千絵

(人類学研究所 第一種研究所員)

人類学者・考古学者はフィールドでの出来事を、民族誌としてまとめあげる過程で、理論的な考察をおこなうことで、学問への貢献を果たす。一方で、1990年代以降、いわゆるマリノフスキーを典型とするスタイルにとどまらない、多様なフィールドワークや記述方法の模索、理論構築の試みがおこなわれている。それゆえ、その学問的営みがもはやホリスティックな理論に集約させることだけが目的ではない、もしくは各論の積み上げが主流となることによって誰しもが拠るメジャーな理論自体が不在となっているかのような状態にある。また、現地の研究者やインフォーマントとの協働がますます要請される現在において、その成果のとりまとめには、むしろ現地において構築された理論への理解が不可欠であろう。

それでは、いわゆる「大きな理論」と、各地において構築されてきた「現場の理論」はどのような関係にあるのだろうか。本研究会では、人類学・考古学における「大きな理論」をメンバー全員で整理し、同時に各メンバーがフィールドにおける「現場の理論」を報告することを通じて、人類学・考古学における両者の関係性を検討する。この取り組みは、転換期を迎えている人類学・考古学的思考の再検討を図ることを可能にするとともに、フィールドに立つ我々研究者ひとりひとりが眺める理論の定点観測の共有にもつながると考える。

2年目にあたる2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、3回ともオンラインでの実施となった。

## 第1回研究会

日時 2020年10月24日(土) 15:00～17:30

会場 Zoom 開催

発表① 藤川美代子(南山大学・准教授)  
「中国の水上居民はいかにして研究の俎上にのせられたか」

発表② 宮脇千絵(南山大学・准教授)  
「中国民族研究と少数民族の服飾へのまなざしの変遷」

## 第2回研究会

日時 2021年2月21日(日) 15:00～17:30

会場 Zoom 開催

発表① 高村美也子(南山大学)  
「スワヒリ (Swahili) 形成過程と現在のスワヒリ」

発表② 菅沼文乃(南山大学)  
「現在の若狭村御願－「やり方」の継承にみる」

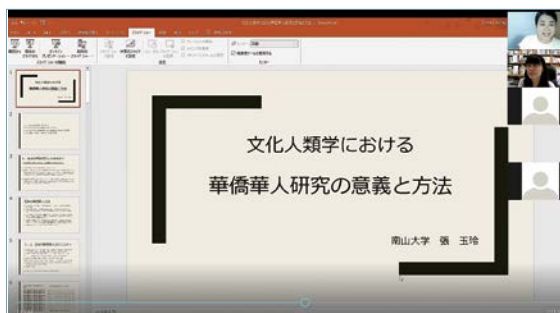
## 第3回研究会

日時 2021年3月14日(日) 10:00～12:30

会場 Zoom 開催

発表① 野澤暁子(南山大学/名古屋大学/ミシガン大学)  
「ジャワ遺跡壁画の物語－文献学的解釈と文化実践」

発表② 竹内愛(南山大学)  
「ネパール社会における女性自助組織の成立と変遷－開発論とジェンダー人類学」



## 研究業績

### DORMAN, Benjamin

#### 論文

“Reflections on Australian Connections.”  
*Nothing Matters But Love: In Memory of Michael T. Seigel*, 328-329. Nagoya: Nanzan University Institute for Social Ethics

#### 寄稿

“Editor’s Note”, *Asian Ethnology* 79/1, pp.1-2, 30 June 2020.

“Editor’s Note”, *Asian Ethnology* 79/2, pp.215-216, 5 January 2021.

### 宮脇千絵

#### 共著(分担執筆)

「座談会4 稼ぐ×社会階層」、上羽陽子・山崎明子(編)『現代手芸考—ものづくりの意味を問い直す』、pp.187-197、フィルムアート社、2020年9月。

「中国・モンの衣装を商売にする」、上羽陽子・山崎明子(編)『現代手芸考—ものづくりの意味を問い直す』、pp.183-186、フィルムアート社、2020年9月。

「第5章 移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服—雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民族間関係」、川口幸大・堀江未央(編)『中国の国内移動—内なる他者との邂逅』、pp. 161-200、京都大学学術出版会、2020年12月。

#### 国際学会発表

A New Style of Ethnic Clothing: Tradition and

Fashion for Hmong dress in China, The Textile Society of America 17th Biennial Symposium "Hidden Stories/ Human Lives", The Textile Society of America (Online), 15 Oct 2020.

#### 研究会・シンポジウム報告

「中国民族研究と少数民族の服飾へのまなざしの変遷」、共同研究「人類学・考古学の「大きな理論」と「現場の理論」」、南山大学人類学研究所(オンライン)、2020年10月24日。

「エスニック・ファッションショーに関する試論」、国立民族学博物館共同研究「伝統染織品の生産と消費—文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる」、国立民族学博物館、2021年1月24日。

#### 講演

「ミャオ族／モン・わたしたちのミュージアム—雲南省の博物館事情」『武蔵野美術大学 2020 学芸員課程特別授業』、武蔵野美術大学(オンライン)、2020年11月12日。

#### 書評

「佐藤若菜(著)『衣装と生きる女性たち: ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学学術出版会、2020年」『文化人類学』85(4): 758-761。

#### その他研究業績

「はじめに」、南山大学人類学研究所(編)『じんるいけん Booklet vol.7 人類研の歩みと人類学の未来』、pp. i - iii、南山大学人類学研究所、2020年8月。

「はじめに」、南山大学人類学研究所(編)『じんるいけん Booklet vol.6 人類学と博物館—民族

誌資料をどう研究するのか?』、pp. i - iii、南山大学人類学研究所、2020年8月。

「趣旨説明」、南山大学人類学研究所(編)『じるいけん Booklet vol.6 人類学と博物館—民族誌資料をどう研究するのか?』、pp. 3-9、南山大学人類学研究所、2020年8月。

## 科学研究費助成事業 (2020年度採択課題)

氏名	採択課題		
石原美奈子	基盤研究 (B)	エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証：アラビア文字資料の収集・分析を通して	継続
渡部森哉	基盤研究 (B)	南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究	継続
後藤明	基盤研究 (C)	人類学が我が町にやってくる!：デジタル・アンソロポリウムの構築	新規
吉田竹也	基盤研究 (C)	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探究	継続
中尾央	基盤研究 (C)	戦争と道徳性の進化に関する自然哲学的考察	新規
ANTONY Susairaj	基盤研究 (C)	新興中間層の台頭とインド映画の新局面—新ジャンルの成立と映画産業の変貌を焦点に	継続
張玉玲	基盤研究 (C)	福建省福清出身華人の移住および同郷紐帯の拡大と文化的・社会的制度としての「故郷」	継続
藤川美代子	若手研究 (B)	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究：日本・中国の都市部と村落部の比較	継続
藤川美代子	若手研究	海洋生物の捕獲と養殖をめぐる文化人類学的研究：中国・台湾・フィリピンの事例から	新規
宮脇千絵	若手研究	現代中国における少数民族女性の稼得労働とエスニシティに関する人類学的研究	継続
中尾央	新学術領域 研究 (研究 領域提案型)	三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進	継続
中川朋美	研究活動 スタート支援	弥生時代における暴力の社会的影響	新規
竹内愛	研究活動 スタート支援	ネパールの旧王都パタンにおける女性自助組織と災害：震災とパンデミック	新規

## 刊行物 【2020年度】

### 刊行物

- 人類学研究所（編） 『年報人類学研究』 第11号（2020年6月30日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 79, Number 1（2020年6月30日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 79, Number 2（2021年1月5日発行）
- 人類学研究所（編） 『人類学研究所通信』 第20号（2020年11月30日発行）
- Takamura, Miyako（ed.） 『人類学研究所研究論集』 第10号 (Wisdom for Living with Natural Disasters)  
（2021年3月31日）
- 人類学研究所（編） 『じんるいけん Booklet 2020 Vol.6 人類学と博物館—民族誌資料をどう研究する  
のか?（人類学研究所設立70周年記念シンポジウム講演録）』（2020年8月31  
日発行）
- 人類学研究所（編） 『じんるいけん Booklet 2020 Vol.7 人類研の歩みと人類学の未来（人類学研究所  
設立70周年記念シンポジウム講演録）』（2020年8月31日発行）

---

### Asian Ethnology Podcast

1. Interview with Mark Bookman: Disability, Accessibility, and COVID-19 in Japan  
(<https://asianethnology.org/page/podcastbookman>).  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Saturday Apr. 4, 2020
2. Interview with Jin Feng: Chinese Foodways  
(<https://asianethnology.org/page/podcastfeng>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Thursday Apr. 30, 2020
3. Interview with Gopalan Ravindran: Media Literacy in Marginalized Communities of Southern India  
(<https://asianethnology.org/page/podcastravindran>)  
Interviewer: Benjamin Dorman  
Published: Monday June 8, 2020
4. Interview with David Faure and Xi He: Historical Anthropology of China  
(<https://asianethnology.org/page/podcastfaurexi>)  
Interviewer: Thomas David DuBois  
Published: Thursday Jun. 18, 2020
5. Interview with Andreas Riessland: What Happens When Fieldwork Fails?

(<https://asianethnology.org/page/podcastriessland>)

Interviewer: Benjamin Dorman

Published: Tues. Jul. 14, 2020

6. Interview with Yoshiko Okuyama: Reframing Disability in Manga

(<https://asianethnology.org/page/podcastokuyama>)

Interviewer: Mark Bookman

Published: Mon. Aug. 24, 2020

7. Interview with Mark Bookman: Introduction to the new series "Disability and Japan in the Digital Age"

(<https://asianethnology.org/page/podcastbookmanseries>)

Interviewer: Benjamin Dorman

Published: Mon. Nov. 24, 2020

8. Interview with Frank Mondelli: Hearing Aids, Assistive Technologies, and Accessibility in Japan

(<https://asianethnology.org/page/podcastmondelli>)

Interviewer: Mark Bookman

Published: Wed. Nov. 26, 2020

9. Interview with Steven Fedorowicz: Deaf Communities in Japan

(<https://asianethnology.org/page/podcastfedorowicz>)

Published: 17 Feb 2021

10. Interview with Susanne Klien: Urban Migrants In Rural Japan

(<https://asianethnology.org/page/podcastklien>)

Published: 11 Mar 2021

## 人類学 研究所 スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin 宮脇千絵	外国語学部英米学科・教授 経済学部経済学科・准教授
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj 石原美奈子 川浦佐知子 CROKER, Robert 後藤明 張玉玲 中尾央 藤川美代子 MUNSL, Roger Vanzila 吉田竹也 RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・講師 人文学部人類文化学科・教授 人文学部心理人間学科・教授 総合政策学部総合政策学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部アジア学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部人類文化学科・准教授 国際教養学部国際教養学科・准教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部ドイツ学科・准教授
博士研究員	中川朋美	博士研究員
研究員	高村美也子 竹内愛	国際化推進事業・研究員 研究員

## 非常勤 研究員 [2020年度]

氏名	研究課題
濱田琢司 (関西学院大学文学部・教授)	「近代化」と「伝統性」をめぐる工芸産地の実践に関する研究について
角南聡一郎 (神奈川大学国際日本学部・准教授)	金関丈夫・国分直一による台湾での学術活動と戦後の人類学／考古学——物質文化からの眺望
山田仁史 (東北大学文学部・准教授)	ドイツ語圏民族学における「大きな理論」と「現場の理論」
藏本龍介 (東京大学東洋文化研究所・准教授)	ミャンマーの仏教NGOに関する文化人類学的研究
中尾世治 (総合地球環境学研究所・研究員)	西アフリカにおける「国家をもたない社会」のふたつの歴史——人類学史とフィールドの歴史との交錯としての歴史人類学
森田剛光	滞日ネパール人の社会適応の動態に関する研究
斉藤典子	日・台・韓の「アマ」(海女と海士)の海洋資源利用と資源分配に関する民族誌的研究
Susanne Klien	Transnational mobile Japanese selves in Europe, moratorium migration and the quest for subjective well-being outside Japan
杉尾浩規	アタッチメントと発達に関する人類学研究の動向と展望
山崎剛	暮らしとともにある人類学の研究
小坂恵敬	パプアニューギニアの国民通過と伝統的通過の歴史的使用にみる人格論
菅沼文乃	沖縄都市部の高齢者を事例とする"生きがい"の人類学的研究——「自分史」をキーワードとして
野澤暁子	中世ジャワヒンドゥー文化の伝承と伝播に関する音楽人類学的研究
梅津綾子	日本で生きるマイノリティ親子・家族の生き方——性的少数者、ムスリムの観点から
佐藤純子	仮面——その根源的意味の考察にむけて
辻輝之	書籍出版計画Sharing Mother: Sociality, Spirituality, and Sexuality of the Walking Stature等
Frank J. Korom	Guru Bawa and the Making of a Transnational Family
Patrick McCartney	Global Yogascapes across the ASEAN Regional Forum(ARF): Transformative Travel, Competitive Diplomacy and Faith-based Development
Paul Capobianco	Foreing(er) Performances in Japan
須田征志	タンザニアにおける伝統医療従事者の知識の共有とモノを介した社会性に関する人類学研究
岡本圭史	アフリカ都市における異人像の人類学的研究——ケニア、ドゥルマ社会の悪魔崇拜言説
Mark Bookman	Local Politics and Global Accessibility: Disability Activism and the 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo
Michael Gillan Peckitt	Representations of Disability in the Japanese Media after Sagami-hara
加藤英明	工場における技術人類学的研究——マニュアル化と技能をめぐる作業者の実践を事例として

人	類	学
研	究	所
通	信	第21号

2020

2021年7月31日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

編集責任者: 宮脇千絵

編集委員: 渡部森哉、ドーマン・ベンジャミン、藤川美代子

事務局: 加藤英明

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3111(代表)

Website: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>



デザイン: 株式会社サウザンドデザイン